メテオールを超える力

仮面ライダースラッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メテオールを超える力

【Ｎコード】
Ｎ７００７Ｘ

【作者名】
仮面ライダースラッシュ

【あらすじ】
遊戯王をウルトラマンの世界にぶち込んでみた話。
過度な期待はしないでください。

始まりの拳

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

突然だが今日、俺が転生して１８年が過ぎた。

前の世界で死んでから神に出会い転生先の世界はランダムに決め、遊戯王のカードを実体化させ事ができるデュエルディスクをもらった。

そしてこの世界に来て２歳の頃、この世界のお爺ちゃんの昔話で俺のいる世界が分かった。

お爺ちゃんは昔、ウルトラマンに助けてもらっていたと俺によく話してくれた。

そして、今この世界にはＧＵＹＳが有る。

つまり、此処はウルトラマンメビウスの世界らしい。

４ヶ月前の新聞でイカルガジョージがサッカーをやっている所からまだ原作前らしい。

勿論ＧＵＹＳに入るつもりだ。

明々後日には俺もＧＵＹＳクルーの仲間入りらしい。

そして今日、避難警報が発令されディノゾールが町に来た。
（召喚したモンスターは俺から離れすぎると消えるため、宇宙で撃退は不可能だった。）
しかし、俺というイレギュラーのせいかディノゾールは2体来た。
暫くしてメビウスが来たが2体相手に苦戦しているらしい。
1体を隙を見て倒したが、まだ1体残ってる。
仕方ないか……
「装備魔法発動！光学迷彩アーマーをDホイールと俺に装備！」
神様が気を利かせてくれてDホイールまでくれてよかったぜ。
「攻撃表示でジャンクシンクロンを召喚！！」
機械の様な黄色の服を着た戦士が現れる。
なお、モンスターは攻撃力が１９００以下だと人間サイズ、攻撃力２０００以上だとウルトラマンの半分、攻撃力４０００以上でウルトラマンと同じだ。
Dホイールで走りながら、モンスターを召喚して行く。
「ボルトヘッジホッグを召喚！！」
ネジが背中についたネズミが出てくる。

「レベル2！ボルトヘッジホッグに、レベル3！ジャンクシンクロンをチューニング！」

三つの輪がボルトヘッジホッグを囲む。

「シンクロ召喚！現れろ！ジャンクウォリアー！！」

光差す道から、ガラクタの戦士ジャンクウォリアーが現れる。

「ジャンクウォリアー！ディノゾールに攻撃！スクラップフィスト！！」

『であぁ！はあぁぁぁ！！だぁ！！』

空中に上昇して、急降下してエネルギー状の拳をぶつける。

その威力にディノゾールが爆発する。

俺はDホイールを止める。

「さあ、これからが始まりだ！！」

さてと、これからどう生きていきますか。

GUYSの仲間

タスケ　ジンカSIDE

ディノゾールを倒した翌日の新聞は怪獣とウルトラマンの再来がデカデカと載っていた。

ジャンクウォリアーについては載ってなかったけどな！（ＴｏＴ）

まあ、そんな事より俺もついにＧＵＹＳクルーに入れました。

今はトリヤマさんが東京湾から電波が発見されたとかで文句を言っている。

「それで、クルーの補充の方はどうなっている？ちゃんと進んでいるのかね！？こっちはディノゾールの死体の処理で忙しいんだ。ああ、忙しい！忙しい！」

最初から最後まで文句を言って出て行った。

暫くしてサコミズ隊長が口を開いた。

「それじゃあ、自己紹介をしてくれないかい？ジンカ君？」

「あ、はい！タスケ　ジンカです！１週間前にＧＵＹＳへの入隊を希望し、此処に配属されました！これからよろしくお願いします！」

「ジンカか……俺は、アイハラ・リュウ。たぶん、サコミズさんの代わりに前線で指揮を取ることになるからまあよろしくな。」

「はい！よろしくお願いしますアイハラさん！」

「リュウでいいぞ。」

「僕はヒビノミライ！これから宜しく！」

「では、自己紹介も済んだ所でミーティングを始めるぞ。」

「で、サコミズさん？何を会議するんですか？」

「朝９時からのＧＵＹＳの行動さ。ジンカ君は基地に残り異常事態に備えてくれ。」

「はい！」

「ミライとリュウは一般人のスカウトに回ってくれ。」

「「了解！！」」

〜〜朝１０時半〜〜

二人は帰ってきたが、

「僕はそうは思いません！彼らはＧＵＹＳのクルーに相応しい人たちです！！」

「……好きにしやがれ！俺は俺で勝手にやる！」

帰ってきて早々喧嘩はやめてくださいよ…はぁぁぁ～…

「ちょっと、行ってくる。」

「はい、サコミズ隊長。」

サコミズ隊長が出て行った後、ミライさんも出て行った。

「やっと一人になれるな。」

俺はＵＳＢメモリを取り出した。

「これで誰にも見られないな。」

俺は、キーボードを打ち始めた。

～～１１時～～

ミライさんが連れて来た４人（テッペイ、マリア、コノミ、ジョージ）とリュウさん、そして俺はガンフェニックスの塗装作業をした。

休憩中にカレーを食べ、リュウさんが昔の防衛チームのマシンを説明したりして、再び塗装。

あっという間に仕上がり、皆の絆も深まった気がした。

塗装が終了して直ぐに俺は、メインルームでガンフェニックスの状

態を確認していると、警報がなった。

地底からグドンが現れた！

全員が集まり、モニターのグドンを見てミライさんが４人を説得。
多少のイザコザがあったが４人も急遽クルーとして戦うことになった。

そんな中俺はと言うと、

「何で、カメラマンなの～！？」

「すまないね。そのカメラは怪獣のありとあらゆるデータを取れる完全観察型のカメラなんだ。
グドンから１ＫＭ以内でいいからなるべくデータを取ってくれ。」

と、サコミズ隊長からの命令の為、車で移動中です。

それで、リュウさん達は４人の入隊と共にメテオールを使用。しかし、マリアさんが途中で限界に達しリュウさんの方も時間切れで鞭を喰らいそうになる。

「トラップ発動！ヒーローバリア！」

ここで予備知識だが、攻撃反応型のトラップは攻撃の仕方で違うトラップを発動しなければならない。

今回の場合、ビーム攻撃ではないのでドレインシールド、マジックシリンダー等の反射や吸収は使えず、また、次元幽閉や攻撃の無力化は主に突進や飛び掛り等に使用できる。

体の一部を使ったり、ビームやミサイル等の爆発系を防げる万能なのはヒーローバリアである。

そして、グドンはそのまま次の攻撃をして、ヒーローバリアを破壊する。

鞭がマシンに当たる少し前にメビウスが登場。

庇いながらも何とか何も無い土地に場所を移動した。って、追いかけなきゃ！

その後、格闘戦して弱って隙を見せたグドンに、メビウムブレードが炸裂！

グドンの鞭を切り落とし倒した。

初の接触（前書き）

この小説の主人公の能力の設定

・正規の召喚手順をしなくてはならない。つまり、簡単に強いモンスターは現れない。
・攻撃表示だと一度でも攻撃を受けると消える。
・守備表示だと、防御力以上の攻撃を受けると攻撃を相殺してから消える。
・モンスターの制限時間は１分。マケット怪獣と同じ。
・モンスターは怪獣の体力以上の攻撃力が有れば倒せる。つまり、ウルトラマンが弱らせたからこそ止めをさせれる。（ＴＶでよく出てきたサドラの体力が３８００位）
・主人公が使っているのは遊星か十代のデッキです。
・フィールド魔法は使えない。

以上がこの主人公の能力の設定です。もしかしたら、もっと制限されたりするかもしれません。
とりあえず、これで納得してくれたら良いんですが・・・・・・・

初の接触

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

只今、ＧＵＹＳで会議中です。

俺が出したヒーローバリアについて話し合っている様です。

「このバリアはリュウさん達の前に現れてグドンの攻撃から守ってくれたんですね？」

「ああ、本当に守ったかは怪しいが……」

「でも、このバリアがなかったら墜落してたんですよね？リュウさんもジョージさんも怪我しなくてよかったですね！」

「……それで、テッペイ。このバリアについて何か分かったかい？」

「はい！実はこれを調べてる時にディノゾールの戦闘記録を観たらこのバリアと同じエネルギーで構成されたロボットの様な戦士が２体目のディノゾールを倒していました。本部は内部の人間以外には見せないようですけど。」

「まあ、ＧＵＹＳは組織だからな。得体の知れない奴に守るべき地球を守られたんだ。正体が分かるまで隠すだろう。」

「それで、結局この二つは何なの？」

「ロボの様な戦士からは生体反応も確認されました。どうやら、エネルギーで形作られた命のようです。バリアの方は生体反応は確認されませんでした。
エネルギーはどうやら過去に存在していたマイナスエネルギーの様な感情のエネルギーの様です。」

おお、正解だ！この実体化はカードの内側の思いで出来ているんだ。

「しかし、どんな感情なのかは分かりません。少なくとも悪い感情ではないようですけど……」

「何だよ。はっきり出来ねぇのか？」

「すみません。まだ分からないんですよ。」

「まあ、敵に回ってきたら遠慮なく撃つけどな。」

「…じゃあ、会議は終了だ。休憩に入ってくれ。テッペイ、お疲れ様。」

〜〜橋の下　休憩時間〜〜

さてと、カードと話でもするかな？

「あ！ジンカ君！」

あれ、ミライさんが何でこんな所に……まさか！

「ちょっと、先の会議に出てきたエネルギー体について話したいん

ですが。」

ばれたな。顔つきが真剣だな。まあ、ウルトラマンならばれてもいいか。人間にばれたらこれを解析されちまう。

「話ってなんですか、ミライさん？」

「君があのエネルギー体を操っているんですか！？」

「やっぱりか。ばれない様にしたのにな～。」

「君は、この星で何をしている！？どこの星の者だ！」

ミライさんは素早く銃を俺に向ける。

「僕は地球人だよ。ただ特殊な能力を持っているだけだよ。」

「特殊な能力？」

「っと、話をする前に君の実力を見せてくれよ！ウルトラマンメビウス！」

「！？」

ミライさんが驚いている間に、俺はカードを引いた。

「俺はスピードウォリアーを召喚して俺に装備！」

下級モンスターは装備できるが、レベル５以上は無理。

「メビウスゥゥゥ！」

変身したか。

「喰らえ！ソニックエッジ！！」

回転蹴りをミライに、否、人間サイズのメビウスに放つ！

しかし、側転で避けられる。

「トラップ発動！仕込みマシンガン！」

マシンガンが下から出てきてメビウスに向かう。

しかし、メビウスは素早くバリアを張り防ぐ。

「どうして、こんな事をするんだ！君は地球人じゃないのか！？」

「これはテストだ！俺のことをお前に話すか話さないかのな！」

「く！」

素早く近づいて蹴りを入れる。

スピードウォリアーの実体化状態の効果はスピードが常に上昇と、蹴りの速度の上昇だ。

直線の速さなら、チーターより少し劣る程度だ。

ウルトラ戦士といえどこれは本気を出さないと負けるぞ？

「はぁ！」

メビウスの攻撃を避ける。

ちなみに、フィールドバリアを張っている為、この戦闘のエネルギー反応どころか音や俺達の姿すら見えないようになっている。

ＯＣＧのフィールドバリアの能力とかけ離れすぎだろ。

「さっさと光線を使ったらどうだ！」

「く！」

ブレスレットから、光弾を撃って来たか。

甘いけどな！

「当たらなければどうと言う事はない！」

避ける！

しかし、

「な！？」

メビウスがエネルギーを腕にためて突っ込んできた。

俺が驚いた隙にメビウスの拳が俺を正確に突いて来る！

が、スピードウォリアーが装備を強制解除し俺の代わりに攻撃を受ける。

「サンキュー。スピードウォリアー。」

そして俺は両手を挙げて、

「参った、降参だ。俺のことについて話してやるよ。」

メビウスは変身を解く。

「じゃあ、話してくれないか。能力の事と僕の正体を知っていた理由を。」

〜〜説明中〜〜

「じゃあ、君はその能力でカードを実体化させていた。そして、能力の暴走で未来を見たと。」

「ああ。」

転生うんぬんは教えなかった。

「でも、遊戯王か。そういえば持って来てたっけ。ウルトラ製のカード。」

「え！？有るの！？光の星に！？」

「うん。宇宙でも大流行で星によって違うカードも作ってるし。最

近じゃあ、バルタン星人も作ってるらしいし。なんでも、これを研究して地球の文化を知ろう！とかなんとかで。」

えぇぇぇ！！！マジかよ！

「今度、デュエルしない？」

「うん！いいよ！」

こうして、メビウス（＝ミライ）と仲良くなったのだ。

因みに、この世界の地球の遊戯王は防衛チームと怪獣がモデルにされているのだった。

初の接触（後書き）

今回はメビウス戦でした。
今、親にパソコン禁止にされていますので更新できるのは休日や金曜日ですね。
あと、感想を読みましたが悪印象でしたね。
でも、これからなるべく良くなる為に頑張りますので読みたい人だけ読み続けてください。

この小説はメビウスのストーリーの回と決闘（デュエル）の回の両方を書いていきます。
オリカがでますが、亀7さんのとなるべく違うステータスにします。
というか、亀7さんの方が強過ぎるから、なるべくＯＣＧに出ても問題ない位のカードにします。
亀7さん、不快に思われたらすいません。

二人の共闘

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

みんなの顔が暗いな…

恐らく3話のバードン出現の前なんだろう。

そんなことを思いながら、ミライと遊戯王をする。

「はい、ジャンクウォリアーでダイレクトアタック。」

これで、5連勝～♪

「あ～あ、やっぱり強いですね。ジンカ君。」

すると、テッペイさんがメビウスのカラータイマーのドアップの動画を出す。

「ちょっと二人共、このカラータイマー気になりませんか？何でこんな物があるんだろう？」

「そりゃあ、あんだけ攻撃喰らえば危険信号が鳴るだろ。まあ、もしかしたら一定時間で鳴るかもしれないけどな。」

「う～ん、それが正しいのかな～？」

暫くすると、警報が鳴り始めた。

「火山に大型の謎の影をＧＵＹＳスペーシーが発見！至急調査に向かってください。」

「ＧＵＹＳサリーゴー！」

「「「「「「「Ｇ．Ｉ．Ｇ！」」」」」」」」

〜〜夜中　噴火中の火山〜〜

俺は、今回は車ではなく偵察用の速度と操作性重視の飛行機一人で乗っている。

「火山地帯が危険なのは分かりますが、何でこの前は車だったんですか？」

「怪獣の視線は高い位置にいる。飛行機のほうが発見され易いが、車なら怪獣は同じ物が有るから気にも留めないだろうからね。」

「あ、そう言う事〜！」

他の皆は地上に降りて、俺は空中から探すことになった。

暫くすると、ミライとマリアさんの方にゆれが発生した。

そして、火山怪鳥バードンが現れた。

俺は無線を切った。

「っち、しょうがない！融合発動！ネオスと戦士族のエッジマンを融合！こい！Ｅ・ＨＥＲＯネオス・ナイト！！」

ネオス・ナイト攻撃力２５００→３８００

「いけ！ラス・オブ・ネオス・スラッシュ！！」

『でぁぁぁ！！』

しかし、バードンの体力はどうやらネオスの攻撃力を上回っているようだ。

モンスターは怪獣の体力以上の攻撃力で攻撃して一撃で倒す必殺型。

しかし、体力が攻撃力以上だと体力を５００減らす攻撃にしかならない。

「まあ、計算道理だ。まずは、体力を減らすか。魔法発動！ファイアーボール！」

しかし、バードンに火は効果が薄くネオスが攻撃を受ける。

そして、霧と成って消えていく。

「くそ！このデッキの中で廻りに被害を与えない攻撃ができる貴重な一体が！」

ネオス・ナイトは剣で攻撃するので、回りに被害を与えない上に、融合素材で攻撃力が上がる。

実体化での戦闘では一番いいモンスターだ。
それを早々に失うとは、俺はやはりこういう戦闘の経験が無いな……
「ん？」
考えを巡らしていると、ウルトラマンメビウスが光と共に現れた。
「とりあえず、援護に回ろう。」
すると、バードンが翼を使って風を起こして来た。
「なら、これだ！融合発動！来い！マッドボールマン！」
丸い土のようなマッドボールマンが現れ、メビウスとバードンの間に立つ。
「装備魔法！巨大化発動！」
マッドボールマンの大きさが、2倍となり強風からメビウスを守る。
「今だ！」
メビウスは俺のほうを見てうなずくと、バードンに走っていった、
しかし、バードンが火を吐いてメビウスを攻撃。
何とかよけるが、空中でバードンの毒を受ける。
何とか気合で動こうとするが、毒が効き始めていて動くことすらま

まならない。

「やばい！とりあえず、トラップ発動！ヒーローバリア！」

バードンの攻撃からメビウスを守る。

そして、ガンウィンガーの攻撃を受けたバードンはメビウスの光弾を避けて空へ飛んでいった。

追おうとしたが、ミライが毒を受けているので全員はフェニックスネストへ帰還した。

〜〜フェニックスネスト〜〜

ＧＵＹＳオーシャンにバードンを任せて、俺達ＧＵＹＳジャパンは仮眠をとった。

〜〜朝〜〜

テッペイさんが徹夜してウルトラマンについて調べていた事を話した。

ミライと隊長が来て話し終わるとバードンが日本に接近していた。

俺はもうデータをとる必要が無い為、先にバードンの着陸予測地点にスタンバイしている。

暫くすると、ガンウィンガーとガンローダーのマニューバモードが

切れてバードンは日本に着陸した。

俺は、銃を撃ってバードンの毒袋を狙って撃ったが、当たらない！

風のせいで視界が悪い。

そして、カラータイマーが鳴っている状態のメビウスが現れた。

攻撃して、避けて、反撃してを繰り返すと、バードンが飛びながら突っ込んで来た。

一回目は避けるが、二回目が当たりそうになった時、キャプチャーキューブで守られた。

その後、リュウの渇とＧＵＹＳのサポートでバードンを無事にメビウムシュートを撃って倒した。

そして、フェニックスネストでは新しく現れたウルトラマンの名称がウルトラマンメビウスと決まった。

二人の共闘（後書き）

次回はミライ対ジンカのデュエルです。
お楽しみに。

ウルトラマンのデュエル（前書き）

この小説でのルールは初期ライフは４０００で、マスタールールが適用されています。
カードの説明は使われたオリカだけ書きます。ご承知ください。

ウルトラマンのデュエル

～～バードンとの戦闘前～～

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

と言う事で、休日にミライを俺のアパートまで連れてデュエルをする事にしました。

光の国のカードだってばれたら大変だから俺の所でやる事になった。

「では、はじめましょう！」

「「デェエル！！」」

デッキ名：命掛けの守護（ミライ）ＶＳ不動遊星っぽいデッキ（ジンカ）

先攻はミライ。

「僕から行きます！ドロー！

僕は手札から【ウルトラマンドーロ】を召喚！」

ウルトラマンドーロ　光属性　☆３　戦士族　ＡＴＫ３００　ＤＥＦ２０００

やはり知らないカードだな。

「このモンスターを攻撃表示で召喚された時カードを一枚ドローします！
更に、ドローしたカードが光属性ならこのモンスターを守備表示に変更します！
僕が引いたのは【ウルトラ兄弟　ジャック】！光属性なので守備表示に変更します！
カードを２枚伏せて、エンドフェイズ時にドーロが守備表示のため僕のＬＰに１００のダメージを受けます！
ターンエンドです！」

ミライ　ＬＰ４０００→３９００

まあまあな効果だな。

「俺のターン！ドロー！手札から【死者への手向け】を発動！手札一枚を捨てて相手モンスターを破壊する！俺はドーロを破壊する！」

「伏せカードを使います！【ウルトラの母の奇跡】！
このカードはウルトラと名のついたモンスターがメインフェイズ時に相手のカードの効果で送られたターンのメインフェイズ２で墓地から特殊召喚します！」

ウルトラの母の奇跡　通常罠　効果：ウルトラと名のついたモンスターがメインフェイズ時にカードの効果でフィールドから墓地に送られた時に発動できる。墓地から破壊されたモンスターをメインフェイズ２に特殊召喚する。

「更に、ジャンク・シンクロンを攻撃表示で召喚！ジャンク・シンクロンの効果で墓地のスピードウォリアーを守備表示で特殊召喚！

行くぞ、ミライ！レベル２、スピードウォリアーにレベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚！来い、ジャンクウォリアー！それじゃあバトル！
ジャンクウォリアーでダイレクトアタック！」

「トラップを使います！【緊急出動】！手札からウルトラと名がつくモンスターをライフを半分払って特殊召喚する！こい、ウルトラ兄弟　ジャック！」

ウルトラ兄弟　ジャック　光属性　☆６　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１６００

ミライ　ＬＰ３９００→１９５０

「っち！攻撃中止だ！」

「メインフェイズ２にドローロを復活させます！」

「１枚伏せてターンエンド！」

ミライ　ＬＰ１９５０→１８５０

「僕の番です！ドロー！ドーロをリリースして、【ウルトラマンティガＬｖ６】を召喚！」

ティガキターーーー！！！

ウルトラマンティガ　光属性　☆６　戦士族　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１５００

「ティガは僕のＬＰが初期のＬＰの半分以下の場合、デッキに戻すことでウルトラマンティガと名のつくモンスターをデッキから召喚できます！僕は攻撃表示で【ウルトラマンティガ　パワー】を召喚します！」

ウルトラマンティガ　パワー　光属性　☆７　戦士族　ＡＴＫ２７００　ＤＥＦ２０００

「行きます！ティガでジャンクウォリアーに攻撃！」

「トラップ発ｄ「パワーの効果でトラップは僕のバトルフェイズには使えません！」っく！」

ジンカ　ＬＰ４０００→３６００

「続けて、ジャックで攻撃！」

ジンカ　ＬＰ３６００→１２００

「やるな！」

「僕はこれでターンエンド！」

さてと、これで逆転できるかな・・・？

「俺の…ターーーン！……よし！手札を捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚！更にクイック・シンクロンのレベルを１つ下げて、レベルスティーラを特殊召喚！そして、ジャンク・シンクロンを召喚！効果でスピードウォリアーを特殊召喚！」

「モンスターが４体も！？」

「レベル１のスティーラとレベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！
こい！アームズエイド！
更にレベル２のスピードウォリアーとレベル４のクイック・シンクロンをチューニング！
現れろ！ブリューナク！
そして、アームズエイドを装備してバトル！」

ブリューナクＡＴＫ２３００→３３００

「ジャックに攻撃だ！凍えろ！アイスエッジ！」

ミライ　ＬＰ１８５０→９５０

「まだまだ！アームエイドの効果！破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

ミライ　ＬＰ９５０→０

「あ～あ、僕の負けですか。」

「今回は勝たせてもらったぜ！ミライ！」

「ねえ、もう一度やりましょうよ！」

「おう！また勝ってやる！」

こうして、俺の休日は過ぎて行った。

ウルトラマンのデュエル（後書き）

初めてのデュエルシーンなので何か間違えが有れば遠慮なく言ってください。

3体の守護者

ジンカＳＩＤＥ

今回は基地の外でマケット怪獣のテストです。

「そして！私の提案でマケット怪獣、第一号に選ばれたのは「うしゃぁ！実験第一号は俺だ！」

そして、カプセルを持って指定エリアまで降りていったリュウさんはミクラスを呼び出した。

「なんか、弱そ～…」

「しかも、不細工だな。」

「「かわいい…」」

上からマリアさん、ジョージさん、コトミさんと俺。

ミクラスは辛辣な言葉を貰いました。でも、よく観ると可愛いんだよな、これ。

そして、ミクラスはコトミさんを見て目を潤した。

なんなんだ、この怪獣…

ん？なぜ俺を見てる？そして、うれしそうにしてるし……お父さんとでも思われたのか？

「ミクラスには明らかに人類に味方をしていた形跡が有る。しかし、敵を倒した記録は一つもありません。」

「でも、なんでミクラスを選んだんですか？味方をしていた形跡があるのはウィンダムやアギラもそうじゃないですか？」

「ウィンダムは遠距離攻撃の威力がまだ再現できず、アギラとミクラスは多数決でミクラスに決めたのだ。」

おお、そう言う事情が有ったのか。

「しかし、ウィンダムはもう少しで完成まで来ているので時間の問題です。」

「早く始めません？」

「ですよね～。」

「ミクラス！ディノゾールをぶっ潰せーーー！！」

リュウの指示に従ってミクラスは走り始めたが岩に躓きこける。

【バニッシュ】

ジョージさんに代わる。

「流星シュートを見せてやれ！アミーゴ！」

岩を前に置き蹴ろうとするが、足を上げ過ぎてこける。

【バニッシュ】

テッペイさんに代わる。

「泣き声で敵を威嚇している…！習慣や本能まで再現してるなんて、すごいな～メテオール！」

観察して時間を忘れるテッペイさん。

【バニッシュ】

マリアさんに代わる。

「頼んだわよ。ミクラス。」

しかし、ミクラスはマリアさんを捕まえてそのまま時間切れ。

【バニッシュ】

テントの上に落ちるマリアさん。ご愁傷様。

そして、俺に代わる。

「ミクラス、ジャンプしてディノゾールを潰せ！」

ミクラスは少し怯える。

「怖がるな！お前にはその力がある！」

目をッキリっとさせるミクラス。

「いいぞ、ミクラス！のしかかれ！」

思いっきりジャンプするミクラス。

そして、そのままディノゾールを押しつぶす。

「良くやったぞ。ミクラス！」

【バニッシュ】

コノミさんに代わった。

「ミ・ク・ラ・ス！がんばって！怖くないから！」

ミクラスはまた怯えた目をせずにディノゾールに突っ込んでいた。

そして、ディノゾールに当たった！ってあれ、ここは消えるんじゃなかったけ？

どうやら、ここで原作ブレイクしてしまったようだ。

そして、俺達はフェニックスネストへ帰った。

〜〜フェニックスネスト　ケルビム出現前〜〜

「さてと、今回は遊星っぽいデッキで行くか。」

因みに、対怪獣用にバーンカード（ファイアーボールや仕込みマシンガン）や、
動きを封じるカード（六亡星の呪縛、デモンズチェーン等）を入れている。

そして、警報が鳴る。

「行くか！」

俺は走り出した。

〜〜メインルーム〜〜

「遅れました！」

『宇宙怪獣がＶ－７７の穴を狙ってきました。レジストコードはケルビム。』

「ＧＵＹＳサリーゴー！！」

「「「「「Ｇ．Ｉ．Ｇ！！！」」」」」

「お願いね。コノミちゃん。」

「…Ｇ．Ｉ．Ｇ！」

「ジンカはセンサーフェニックス（偵察飛行機の名称）で向かってくれ！」

「G．I．G！」

こうして俺は、ケルビムが出現した町に向かった。

〜〜町〜〜

俺は、ビルの屋上に着陸した。

「とりあえず、ケルビムの攻撃からなるべく町を守るか。こい！サイバードラゴン！」

機械で出来たドラゴンが現れる。

『ジンカ君！君の近くに謎のエネルギー体が出現！注意してください！』

「大丈夫ですよ、テッペイさん！奴が見ているのはケルビムです！」

そんな会話をしていると、ケルビムが火球を吐いた。

「っつ！サイバードラゴン！」

サイバードラゴンはレボルーション・バーストを吐いて火球を相殺した。

しかし、ケルビムはリュウさん達の接近に気づき体ごと回転させ尻尾で町を壊そうとする。

「させるか！六亡星の呪縛！」

六亡星が表れ、それが怪獣の動きを止める。

しかし、１０秒でそれは破かれた。

そして、ミクラスが出てくるが逃げ始める。

更に、攻撃を受けて消える。

町は守ったものの残ったのはミクラスの汚名だけだった。

〜〜フェニックス・ネスト〜〜

そして、トリヤマ補佐官に文句を言われているコトミさん。

「幸い、ケルビムは日本海に潜伏中だが、敵前逃亡とは……」

「すみません！私…怖いのだめなんです……」

「補佐官！マスコミが、会見場に集まっていますよ！」

「分かっておる！」

補佐官は出ていった後、皆はコノミさんが悪いんじゃないと言っていたが、コノミさんは暗いままだった。

その後、会議の結果ミクラスでの接近戦でケルビムを制圧するしかないようだ。

〜〜昼〜〜

皆がコノミさんを励ましに行ったようだが俺は警報に備えていた。

「あれ、そのカード。あ、遊戯王かな。」

サコミズ隊長が俺の横から出てきた。

「あ、はい。すいません！」

急いで片付け始めるとサコミズ隊長が俺の手を制した。

「いいよ別に。それに彼から君の事は聞いているよ。」

あ、そういえばこの人最初からミライの事情していたっけ。

「今度、私とやろうか。」

「いいですよ。」

こうして、サコミズ隊長とデュエルの約束を交わした。

その後、ケルビムが出現した。

〜〜再び町〜〜

コノミさんはミクラスを出し、今度こそ敵に向かっているミクラス。
俺は自分側の無線を切り、センサーフェニックスの中で、
「☆5サイバードラゴンに☆3ジャンク・シンクロンをチューニング！飛翔せよ、スターダストドラゴン！」
光差す道から、白銀色の光を放つ竜が現れる。
『綺麗…』
無線からマリアさんの声が聞こえる。
「響け！シューティングソニック！」
ケルビムに放った光線は命中し、怯んだケルビムにミクラスが突進。
しかし、ケルビムは反撃を始めてミクラスを尻尾で捕らえた為、シューティングソニックが撃てない！
その時、光の中からメビウスが現れた。
メビウスはケルビムを殴り、ミクラスを助けた。
そして、再び3体はケルビムに向かった。
ミクラスが突進して後退、メビウスが前進して殴り倒れるケルビム。
ミクラスは素早く近づき、ケルビムを抑える。

「今だ！シューティングソニック！！」

そこに、メビウスの必殺技であるメビウムシュートとシューティングソニックが炸裂しケルビムは倒される。

【バニッシュ】

ミクラスはうれしそうに鳴きながら消えていった。

ＧＵＹＳメンバーからは歓声があふれていた。

その後、ミクラスは回収されたが時間が経てば帰って来るらしい。

「よかったですね。コノミさん。」

「はい！」

さてと、次はボガールか……

ネタ回　過去の無双（前書き）

ネタがないからネタ回で誤魔化そう。
主人公の性格が壊れています。

ネタ回　過去の無双

～～ディノゾール出現時　未来オーバーデッキ～～

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

ディノゾールが2体か……

この神から貰った力で、無双してやるよ…クックック！

そして、現れたディノゾール。

俺は颯爽とバイクで町の中に行った。

「さてと、いざ無双タイムだ！」

俺は実体化状態の中でも一番凶悪なデッキをセットした。

五枚引いてから奴らの死は確定した。

「先ずは【未来融合～フィーチャーフュージョン～】で【キメラテック・オーバー・ドラゴン】を選択し、【サイバードラゴン】を含む機械族モンスター４０体を墓地に送って、２ターン（２０分）後に召喚するわけないだろ！【オーバーロード・フュージョン】発動！墓地の全ての機械族を除外して【キメラテック・オーバー・ドラゴン】を召喚！効果で攻撃力アップ！」

キメラテック・オーバー・ドラゴン　ＡＴＫ４０×８００→３２００

「手札から速攻魔法発動！【リミッター解除】発動！機械族の２倍にする！」

キメラテックｋ（ｒｙ　ＡＴＫ３２０００×２→６４０００

此処で考えてもらいたい。ＡＴＫ４０００でウルトラマンと同じ大きさ。

なら、６４０００÷４０００は？

答えは１６。

ウルトラマンの１６倍の大きさの首が５個ある機械竜が町に現れるとどうなる？

答えは町が壊れる。

「あ、やっちゃった♪レボルーション・レサルト・バースト！！４０レンッダァァァ！！！！！」

その後、二度目の神様に出会った。

ネタ回　過去の無双（後書き）

短いですが気にしないでいただけると嬉しいな……

隊長のデュエル

ジンカ　タスケＳＩＤＥ

俺は残業して書類処理をしていた。

それが終わった俺はいつも道理、ミライの部屋の隣の自室に入ろうとしたが、

「「デュエル！！」」

ミライの部屋から隊長の声が聞こえてきたのでドアをノックして入った。

「ジンカですけど、ミライさん入っていいですか？」

「いいよ。」

俺がドアを潜るとサコミズ隊長とミライがテーブルでデュエルをしていた。

「遊戯王ですか？」

「今から始める所だったんだ。光の星のカードも見てみたいからね。よかったら見ていくかい？」

「そうさせてもらいます。」

「では、改めて」

「「デュエル！！」」

デッキ名：命掛けの守護　（ミライ）ＶＳ後方支援　（サコミズ）

先攻はサコミズ。

「私のターン、ドロー！【ジェットビートル】を攻撃表示で召喚する！」

ジェットビートル　風属性　☆３　機械族　ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ１０００

「ジェットビートルの効果発動！手札のジェットビートルを特殊召喚できる！
更にこの効果でビートルを召喚した場合、相手に５００ポイントのダメージを与える！
攻撃表示で召喚！」

ミライ　ＬＰ４０００→３５００

「っく！」

「カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

「僕のターンです！ドロー！僕は【ウルトラマンアタック】を召喚

します！」

ウルトラマンアタック　光属性　☆４　戦士族　ＡＴＫ１８５０
ＤＦＥ１０００

「アタックの効果発動！ＬＰを５００払ってアタックの攻撃力をエンドフェイズまで５００ポイントアップします！」

ミライ　ＬＰ３５００→３０００

ウルトラマンアタック　ＡＴＫ１８５０→２３５０

「更にマジックカード発動！【ウルトラサイン】！デッキから、ウルトラと名のつくモンスターを手札に加えるか、手札のウルトラと名のつくモンスターを召喚できます！
【ウルトラマンネクサス　アンファスト】を特殊召喚！」

ウルトラサイン　速攻魔法　効果：このカードのコントローラーは以下の効果から一つ選び、選んだ効果を発動する。
・デッキの「ウルトラ」と名のつくモンスターを１枚手札に加える。
・手札の「ウルトラ」と名のつくモンスター１体を特殊召喚する。

ウルトラマンネクサス　アンファスト　光属性　☆４　戦士族　ＡＴＫ１７００　ＤＦＥ１２００

「アンファストの効果！自分のＬＰが初期ライフより１０００ポイント以上低い場合、デッキに戻して【ウルトラマンネクサス　ジェネッス】を特殊召喚する！」

ウルトラマンネクサス　ジェネッス　光属性　☆６　戦士族　ＡＴ

Ｋ２５００　ＤＦＥ１４００

「バトルです！ジェネッスでビートルを攻撃！オーバーレイシュトローム！！」

「トラップ発動！【後退射撃】！機械族が攻撃された時、攻撃を無効にして相手に５００のダメージを与えて、攻撃されたモンスターを手札に戻す！」

後退射撃　通常罠　効果：機械族モンスターが攻撃された時、戦闘を無効にして相手に５００ポイントのダメージを与える。その後、攻撃対象のモンスターを手札に戻す。

ミライ　ＬＰ３０００→２５００

「なら、アタックでもう１体ビートルを攻撃！アタックシューター！」

サコミズ　ＬＰ４０００→２９５０

「っく！」

「カードを１枚伏せてターンエンド！」

サコミズ隊長の場はがら空きか。

「私のターン、ドロー！カードを１枚伏せて、マジックカード発動！【ペンシル爆弾】！相手モンスターを選択して破壊し、そのレベル×４００ポイントのダメージを相手は受ける。ジェネッスを破壊する。このカード使用した場合、このターンをエンドする。」

ペンシル爆弾　通常魔法　効果：このカードは召喚を行っていないメインフェイズ１に発動できる。
相手モンスターを１体選択して破壊する。破壊したモンスターのレベル×４００ポイントのダメージを相手に与える。このカード使用した時残りのフェイズをスキップする。

デメリットはデカイが除去とバーンを兼ね備えたカードだな。

ミライ　ＬＰ２５００→１００

「僕のターン！ドロー！来た！
アタックをリリースして、攻撃表示でウルトラ兄弟　メビウスをアドバンス召喚！」

ウルトラ兄弟　メビウス　光属性　☆６　戦士族　ＡＴＫ２３００
ＤＥＦ１２００

「自分を召喚した！？」

「このカードは先日、タロウ兄さんが製造されたから送ってくれたんです！
ＬＰが初期ＬＰの半分以下なのでメビウスの効果を発動！デッキからウルトラ兄弟と名のつくモンスターを墓地に送って、エンドフェイズ時まで墓地に送ったモンスターの攻撃力分、攻撃力をアップします！僕はデッキからゾフィー隊長を墓地に送り、攻撃力を２２００ポイントアップします！」

ウルトラ兄弟　メビウス　ＡＴＫ２３００→４５００

（知らないとはいえ本人の前で本人をモデルにしたカードを墓地に送った……）

あ、サコミズ隊長が苦笑してる。

「さらに、ジェネッスの効果発動！ＬＰが初期ライフの半分以下の時、ジェネッスをデッキに戻し、【ウルトラマンネクサス　ジェネッスブルー】を召喚します！」

ウルトラマンネクサス　ジェネッスブルー　光属性　☆７　戦士族
ＡＴＫ２７００　ＤＥＦ１０００

「（生憎、僕のデッキに【ウルトラマンノア】が無いから召喚できない……）

ジェネッスブルーの効果発動！隊長のセットカードを破壊します！」

「なら、発動しよう。【メテオール解禁！】！墓地に存在する機械族モンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップさせ、攻撃表示で可能な限り召喚できる！私はジェットビートルを全て召喚する！」

ジェットビートル×２　ＡＴＫ１３００→２３００

「このままバトル！メビウスでジェットビートルを攻撃！メビウム７８光線！」

サコミズ　ＬＰ２９５０→７５０

「ジェネッスブルーで攻撃！アローレイシュトローム！」

サコミズ　ＬＰ７５０→３５０

「ターンエンドです！」

さて、どう切り抜けるんですか？サコミズ隊長？

「私のターン！ドロー！……手札から【最後の特攻】を発動！デッキからモンスターを１体、召喚条件を無視して特殊召喚し、このターンのバトルフェイズ時に私のライフはゼロとなる。私はデッキから、【メガキャノンチェスター】を召喚！」

メガキャノンチェスター　地属性　☆７　機械族　ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ２０００

「バトル！メガキャノンチェスターでジェネッスブルーを攻撃！メガキャノンバニッシャー！！」

ミライ　ＬＰ１００→０

「あ～！！隊長にも負けた～……」

あ、隊長笑ってる……ゾフィーを墓地に送ったのを根に持っていたのか？

「まだまだ甘いよ、ミライ。じゃあ、お休み。」

「はい。おやすみなさい。」

俺も寝るか。

「それじゃあね。ミライさん。」

「ふぁ〜い。」

隊長のデュエル（後書き）

サコミズ隊長は科特隊バーンデッキです。
他の戦闘機も入っています。

指摘、感想等お待ちしております。

オリカ紹介　光の国製モンスターカード（前書き）

今回はこれまでのモンスターカードの効果を載せます。
名前しか出なかったモンスターも書いておきます。
登場予定のカードは名前のみです。

オリカ紹介　光の国製モンスターカード

下級モンスター　☆１～４

・ウルトラマンドーロ　光属性　☆４　ＡＴＫ３００　ＤＥＦ２００
このモンスターを攻撃表示で召喚した場合、カードを１枚ドローできる。
この効果でドローしたカードが光属性戦士族の場合、ドローしたカードを見せてこのモンスターを守備表示に変更できる。エンドフェイズに自分のＬＰ１００払うことが出来る。

・ウルトラマンアタック　光属性　☆４　ＡＴＫ１８５０　ＤＥＦ１０００
ＬＰを５００ポイント払い、エンドフェイズまでこのモンスターの攻撃力を５００ポイントアップする。

・ウルトラマンネクサス　アンファスト　☆４　ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ１２００
自分のＬＰが初期ライフより１０００ポイント以上低い場合、フィールドのこのカードをデッキに戻し、【ウルトラマンネクサス　ジェネッス】をデッキ・手札から特殊召喚する。

上級モンスター　☆５～６

・ウルトラ兄弟　ジャック　光属性　☆６　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１６００
自分のＬＰが初期ＬＰの半分以下の場合、このカードに装備された【ウルトラブレスレット】を墓地に送って、フィールドのカード１

枚を破壊する。この効果で墓地に送られた【ウルトラブレスレット】はエンドフェイズにこのモンスターに装備する。

・ウルトラマンティガＬＶ６　光属性　☆６　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１５００
自分のＬＰが初期ＬＰの半分以下の場合、フィールドのこのカードをデッキに戻し、【ウルトラマンティガ】と名のつくモンスターをデッキ・手札から特殊召喚する事ができる。エンドフェイズ時にフィールドに存在するこのカードを墓地に送ってでデッキ・手札から【ウルトラマンティガＬＶ８】を特殊召喚する。

・ウルトラマンネクサス　ジェネッス　光属性　☆６　ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ１４００
自分のＬＰが初期ＬＰの半分以下の場合、墓地・フィールドのこのカードをデッキに戻し【ウルトラマンネクサス　ジェネッスブルー】をデッキ・手札から特殊召喚できる。

・ウルトラ兄弟　メビウス　光属性　☆６　ＡＴＫ２３００　ＤＥＦ１２００
自分のＬＰが初期ＬＰの半分以下の場合、デッキから【ウルトラ兄弟】と名のつくモンスター１枚を選択し、墓地に送りエンドフェイズまで墓地に送ったモンスターの攻撃力分このカードの攻撃力をアップさせる。

・ウルトラ兄弟　ゾフィー隊長　光属性　☆６　ＡＴＫ２２００　ＤＥＦ２１００
自分のＬＰが初期ＬＰの半分以下の場合、このモンスターの攻撃力を１５００アップさせ、このモンスターが戦闘で破壊したモンスターの防御力分のダメージを相手に与える。

最上級モンスター　☆7～8

・ウルトラマンティガ　パワー　光属性　☆7　ＡＴＫ２７００　ＤＥＦ２０００
このモンスターがフィールドに存在する限り、相手はこのカードのコントローラーのバトルフェイズ中トラップカードを使用することはできない。

・ウルトラマンネクサス　ジェネッスブルー　光属性　☆7　ＡＴＫ２７００　ＤＥＦ１０００
自分のＬＰが１０００以下の場合、フィールドのこのカードをデッキに戻し【ウルトラマンノア】をデッキ・手札から特殊召喚できる。
１ターンに１度、フィールドの魔法、トラップカード１枚を破壊できる。

・ウルトラマンノア　☆8　ＡＴＫ３６００　ＤＥＦ２３００
このモンスターは戦闘では破壊されない。
１ターンに１度、フィールドのモンスター１体を破壊できる。
自分のＬＰが１１００ポイント以上有るターンのエンドフェイズにこのモンスターをデッキの一番下に戻す。

登場予定のモンスターカード

ウルトラマンティガＬＶ８
ウルトラマンティガ　スカイ
グリッターティガ

オリカ紹介　光の国製モンスターカード（後書き）

以上です。
何か質問が有るのならどうぞ。
もしこの駄作者のオリカを使用したいのであればどうぞご自由に。

霧の展開

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

いきなりですが、ジョージさんがログアウトしました。

理由は、トリヤマ補佐官（別名トリピー）が持ってきた雑誌や新聞に気に入らないことが書かれていたからだ。

頼むから速く帰って来てくれ。

そう思っていたら、リュウさんを除いた全てのクルーが彼がいるサッカーフィールドまで行った。

補佐官達は気まずくなり出て行き、リュウさんも散歩に行ったし、隊長はコーヒー豆を買いに行ったし、また俺一人か……今日はサドラが来るんじゃないか？

俺はそう思いながらも、ＵＳＢをパソコンに挿して暫く作業をしていた。

〜〜昼過ぎ〜〜

全員が集まり暫くすると、ミサキ総監代理から命令が下された。

『キリフキ山の山頂付近に怪獣発生の疑いが出ております。至急、調査に当たってください。』

「「「「「「「「G．I．G！！」」」」」」」」

来たか！

「ジンカは今回、センサーフェニックスカスタム（偵察機に軽い武装を装備した）で向かってくれ。」

「G．I．G！」

こうして、俺達は調査に向かった。

〜〜キリフキ山〜〜

なんだこりゃ！？

「霧が濃いな…」

全然地面が見えない上に、視界も悪い。

『リュウさん！計器に異常が！』

『この状況でレーダー無しだと！？冗談も…』

無線越しのジョージさんの声が途切れた。

「やば！」

腕が俺の方向に飛んできて急いで回避した。

『ガンフェニックス！スプリット！』

リュウさん達も分離して回避した。

「まずは、センサーフェニックス！スキャナーオン！」

レーダーは調子が悪いがメテオールスキャナーなら！

「こちら、センサーフェニックス！巨大な生命反応をキャッチ！」

『ドキュメントＭＥＴに同種族確認！レジストコードは、』

『岩石怪獣サドラ！』

「サドラなら確か、顔の横にある器官で生体反応をキャッチできるから其処を狙えば！」

『分かっｔ――ッザ――！』

（無産が切れたか。さて行きましょうか！）

どんなに霧が濃くても、

「Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマンとＥ・ＨＥＲＯスパークマンを融合！来い！Ｅ・ＨＥＲＯＧｒｅａｔＴＯＲＮＡＤＯ！」

風のＥ・ＨＥＲＯなら！

「行け！タウン・バースト！！」

ＧｒｅａｔＴＯＲＮＡＤＯが風を起こし霧とサドラの腕を吹き飛ばす。

「たしか、サドラはこの後食われるんだったな。なら此処で倒す！行け、ＧｒｅａｔＴＯＲＮＡＤＯ！スーパーセル！！」

しかし、ガンローダーのヴァリアブルパルサーを謎の光弾が弾き、スーパーセルが当たる直前で何者かがサドラと共に消えた。

「逃がしたか！」

〜〜フェニックスネスト〜〜

「どうやら此処にも俺の居場所は無いようだな！アディオス！」

まったく、チームワークの求められるこの職場で喧嘩するなよ……はぁ〜…

その後、隊長がマリアにコーヒー豆を買いに行かせた。

そして、ミライも暫くしたら出て行った。

さて、夜までどうやって過ごそうかな〜

〜〜夜〜〜

あの後、ミライとジョージがＰＫで勝負して無事に仲直りし、皆にまた共に戦う事になった。

それをリュウさん唯一人を除いて皆が許した。

『ヒガシタマニュータウンにサドラ出現！』

〜〜ニュータウン〜〜

！見つけた！

『ガンフェニックス、スプリット！』

『ブームレッドブラスター！発射！』

「センサービーム！」

あ、また弾かれた！

『あれは、ジョージさんのビームを防いだときと同じ！』

「くそ！全然当たらない！」

『下手に攻撃すると、建物に当たっちまう！』

『心配するな！俺には見える！』

しかし、光弾が飛んできて俺とリュウさん達の飛行機は着陸した。

「とりあえず、融合発動！Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディとＥ・ＨＥＲＯクレイマンを融合！来い、Ｅ・ＨＥＲＯランパードガンナー！！」

『バリアブルパルサー！』

「ランパート・ショット！」

サドラに二つの攻撃が命中したが、サドラがガンローダーを背後から襲う。

「トラップ発動！ヒーローバリア！」

攻撃を防いだもののバリアは砕け散る。

しかし、そこにメビウスが現れ攻撃を防ぎ格闘戦に持ち込む。

だが、サドラは霧を作り出しメビウスを何度も攻撃する。

やがてカラータイマーがなり始めたが、ＧＵＹＳは観戦する為の組織じゃない！

『マニューバモードで奴の懐に飛び込む！隊長！！』

『メテオール解禁！使用限界は１分！』

『パーミッションツーシフト！マニューバ！』

金色の光を纏いながら、ガンローダーがサドラに接近を開始！
サドラの攻撃を避け続け、飛んできた光弾を避ける！
『ヴェンチレイション・ボルテクサー！フリードアップ！』
巨大な竜巻を発生させ霧を吹き飛ばす！
『ヴァリアブルパルサー！』
「ランパート・ショット！」
二つの攻撃は見事にサドラの耳に命中した。
『今だ！決めろウルトラマン！』
メビウスは頷いて、メビウムシュートを発射してサドラを倒した。
しかし、メビウスを隠れていたサドラが攻撃を開始した。
更に、もう一体のサドラが現れ絶対絶命かと思われたが、突然空から青い巨人が現れ光線で2体のサドラを倒して消えていった。
謎を残して……

深海の氷

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

「行ってきます！」

「はい、行ってらっしゃい。」

今はミライとリュウさんが朝練に行くところだ。

他の皆はまだ寝てるか朝食を食べているだろう。

俺はカードを見て考えている。

今回はＶＳツインテールＩＮ深海だからどのデッキで行くか…

遊星っぽいデッキは論外だ。

ジャンク、ターボ系がショートしそうだし、ニトロは火だから駄目だし、ドラゴンも息できるか知らないしな……

では、十代っぽいデッキはどうだ。

バブルマン・アイスエッジ・キモイルカだと火力不足だし、アブソルートＺＥＲＯは氷っぽいし、スチームヒーラ・セイラーマン・マリン、アクワネオスだって火力はイマイチだしな～…

まあ、十代デッキで行って見るか。別に、ほっとけば原作道理だろうしな。

そんなこんなで、今日も始まった。

〜〜訓練時間〜〜

リュウさん、ジョージさん、マリアさん、ミライと共に訓練室で射撃の訓練をしている。

そして、今は俺の番だ。

射撃レベルは3の5。（的が出てきて降りるまでのスピードがレベル3、的の数が5）

（落ち着け…）

そして、下から的が出てくる。

俺は、銃で素早く撃つが5発中3発しか当たらなかった。

そして次はリュウさんの番だ。

射撃レベルは5の1。（的のスピードがマックスで数は1個。）

しかし、外れる。

そこにマリアさんが進み、

「へたくそ。」

一言言ってから集中開始。

射撃レベルは5の5．（的のスピード、数共にマックス）

7秒間の間で正確に訓練マシーンの音を聞き取り発射。

全てが命中する。

「もっと肩の力を抜くことね。」

その後、廊下でマリアさんと喧嘩したリュウさんは1時間以上訓練室に閉じこもった。

〜〜昼過ぎ〜〜

「サドラ…」

映像解析が済んだサドラの映像をメインルームで鑑賞中、解析したおかげで霧が濃かった映像がばっちり映っている。

「問題はこの後なの。」

映像が進むと突然、謎の影がものすごい速さでサドラと共に消えた。

「これは…！」

真剣な顔になるＧＵＹＳクルー達。

「２万分の１でスロー再生します。」

って、どんだけ早いんだよ！！

すると、謎の生命体がサドラに近づいた瞬間に羽を広げ、その羽で捕食している瞬間が映し出された。

その後、ボガールとツルギについて話し終わると毎度おなじみの補佐官から深海の奥に謎の温度を発見したため調査に向かう事になった。

その後、ジョージさんが行けない為、ミライが指名されたがマリナさんを指名した。

って待て！！

「何で俺も行かなきゃいけないんですか！？しかも潜水艦なのにガンローダーで落とされなきゃいけないんですか！？」

「ごめん。でも安全だから……ね？」

「ちくしょ～！」

笑いながらライセンスを取り出すな！隊長命令を使うな！

そんなこんなで俺も行くことになった。

〜〜ガンスイーナー内部〜〜

『ガンスピーダー、リジェクション！』

リュウさんの叫び声と共にガンローダーから発射されるガンスピーダー。

『ガンスピーダー、リローディング！』

俺はというと、

「ミライ〜〜頼むから落とさんといて〜！！＞×＜」

『すみません！ガンスイーナー、リジェクション！」

謝りながら落とすな〜〜！

ザバーーン！！

「こ、こちら、ガンスイーnウプ！！ぶ、無事落下完了…オエ！」

『ジンカ、エチケット袋なら座席の右だから。』

「G．ウプI．G…」

ようやく収まった……

「じゃあ、気を取り直そうか。」

暫くして進むと、

「っち！もう、生まれやがったか！」

ツインテールが生まれていた。

「こちら、ガンスイーナー！怪獣に攻撃する為、一時的に無線をきる。連絡があったら呼んでくれ。」

『わかりました。』

俺はターゲットをロックオンしてオート攻撃に切り替えた。

さて行きますか！

「手札から、融合を発動！フェザーマンとバブルマンを融合！来い！アブソルートＺＥＲＯ！」

すると、着信音が鳴る。

「こちらガンスイーナー。どうかしましたか？」

『謎のエネルギー体が出現しました。一応、用心してください。』

「了解！」

イチイチ召喚するたびに報告か。これは我慢するしかないか。

「って、アブソルート！頼むから冷気を下げてくれ！」

海が氷始めてるんだけど！！って、地球温暖化止められるんじゃね？

とりあえず、冷気を操りツインテールの動きを止めた。
しかし、氷は長くは持たず破壊して再び動くツインテール。
「なら行け！アブソルートＺＥＲＯ！瞬間氷結《Ｆｒｅｅｚｉｎｇ ａｔ ｍｏｍｅｎｔ》！！」
手を刃に変えて、ツインテールの触角を切り裂いた！
「おっし！このまま行けば！」
しかし、その簡単にいかないのが現実である。
いきなり現れたボガールがアブソルートＺＥＲＯを喰らおうとした。
それを素早く氷を作り防御したアブソルート。
「くそ！こんな時に！！アブソルート！そいつを暫く止めてくれ！！」
すると、光が深海に現れメビウスが出現した。
「メビウス！そっち先に倒してくれ！」
此方にうなずくメビウス。
その後、原作よりも弱っているツインテールを簡単にメビウスが倒した。が、

「アブソルート！！」

アブソルートはついに喰われた。

さらに其処にツルギが現れ攻撃するもボガールは瞬間転移して逃げて行った。

「また逃げられた……！」

ジンカの説得（前書き）

7日に誕生日を迎えた作者です。
しかし、ブラジルのケーキは甘すぎるな。

ジンカの説得

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

『ＧＵＹＳスペーシーが？』

トリヤマ補佐官にスペーシーが円盤を見つけたとの報告があったそうだ。

『あの怪獣が仲間でもよびやがったか？』

ボガールでは無い。仲間？ならウルトラゾーン（出現が予測不可能な空間）に居るし、

『いや、青い巨人の方かもしれんぞ。』

ツルギも違う。あいつは今は孤高の戦士だし。

『どちらにせよ、さっさと先制攻撃をすればいいのだ。』

笑いながら言うな。つーか、あんたのその物騒な考えを潰しておいた方がいいかもな。

『その宇宙船が、敵だ言う確証はあるのでしょうか！？』

そうだよ！先ずは話し合おう！それが大切だ！

『昔から宇宙人は侵略者と相場が決まっておろうが！』

ウルトラマンも宇宙人ですよ～って言ちゃだめかな？

『怪獣出現期は怪獣と同時に宇宙人たちが侵略に来ましたからね。』

『そのトラウマで人間には反宇宙人感情があるのは事実だし。』

『そうなんですか……』

一般人だったらともかく地球防衛チームＧＵＹＳの補佐官がそんなんじゃ駄目だろ。

『搭乗者は確認できているんですか？』

『宇宙語によるメッセージが送られているだけです。ＧＵＹＳ本部が翻訳しているようですがＣＰＵに不備がありあまり進んでいないそうです。』

そして、我等の怪獣博士テッペイさんが、

『その通信、聞かせてもらってもいいでしょうか！？』

立ち上がった。

『私らはファントン星人……あんた等の星の時間で６時間後…指定した座標に降りる…ある…』

『この通信が送られたのは約五時間前です。』

『座標は？』

『出します。』

そういってモニターを着ける。

『また、日本だというのか……』

『通訳が必要だね。ＧＵＹＳ、サリーゴー！！』

こうして、皆は指定座標に向かった。

俺？

休暇中ですけど何か？

「これがボガールを爆発させない為の兵器か……たしかにこれがあれば爆発はしないだろうが、出力が問題だ。」

「そうですか…」

誰と話してるかって？

もちろんツルギですが何か？

「このフリーズロックの出力を上げるには怪獣データや君のモンスターの力が必要だ。」

「そうですね。」

今はボガールを安全に倒しす為のフリーズロックを造ってます。前

から時々作業していたのがこれだよ。
隠れてこそこそＧＵＹＳの怪獣データを盗っていたんだよ。
あれ？そんな事よりどうやって説得したかって？
あれは大変だったな～

～～2時間前～～
休暇をもらった俺はツルギを探して居た。
「で、どうだ？」
チェーンウォリアーが手についた銃を右に向ける。
「そっちか！？」
俺はチェーンウォリアーのサーチを辿ってツルギを海岸で発見。
でも、どうやって話そうかな～、なんて考えていたらいきなり光が飛んできて俺は急いで避けた。
しかも、俺の後ろに有った岩が綺麗に切れた。
「誰だ！そこから出て来い！」
しかたないので大人しく出て行った。

「人間か？何のようだ？」

「あんたがツルギか？」

「そうだ。」

「俺はボガールを倒すためにあんたと協力したい。」

「人間の力など要らん！！さっさと消えろ！」

「あんたは知っているだろ！！ボガールが死ねば大爆発が起きる事を！！」

「それがどうした。俺は俺の目的のためならこの星がどうなろうと知ったことではない！第一、遅くなればそれより大きな被害が出るぞ！」

「ふざけるな！犠牲が出ることを知っていながらあんたはそれを救おうとしないのか！」

「人間などあの星の住人に比べれば醜い！」

「あんたは！悲しみを知っているだろ！！自分が無力だと実感した時や大事なものが無くなる時の悔しさを知っているだろ！！あんたがボガールを爆発させればあんたに復讐をしようとする人間が出る事を知っているだろうが！！」

「……」

「俺と戦え！！俺が勝ったら俺と協力してボガールを被害を出さ無

い様に倒すことを誓え！！」

「いいだろう。」

「装備魔法発動！フェニックスブレード！！」

俺はカードから剣を取り出す。

「！！…ほう！唯の人間じゃなさそうだな。（こいつとなら本当に被害が止められるかもしれんな。）」

「行くぞ！」

俺は剣でツルギに突っ込んだ。

そのまま上から斬るが、ナイトブレードで防がれる。

そして、横から切られそうになり急いで回避するも、ボガールと互角のスピードで俺の後ろに回りこみ、追撃される。

「くそ！」

かすり傷だ！

俺は前転しながらもディスクのボタンを押した。

「トラップ発動！仕込みマシンガン！」

下が回転してマシンガンが現れツルギに向かって発射される。

「ふん！」

ナイトブレードを一振りすると全ての銃弾が消えた。

「なら、こいつだ！Ｅ・ＨＥＲＯスパークマンを装備！喰らえ！サンダースパーク！！」

俺はスパークマンを召喚して装備し、手から電撃を放った。

「はぁ！」

ツルギはナイトブレードを一振りして斬撃を飛ばしてきた。

そのまま攻撃が相殺された。

しかし、ツルギは俺の後ろに回りこみきりつけてきた。

「それを待っていた！！」

俺の腹に刺さった剣を手で握った。

「何！？」

「喰らえ！カウンタースパーク！！」

剣に電撃を流した。

「ぐぁぁぁ！！」

その後、無事協力関係を結んだのであった。

〜〜現在〜〜

「ん！」

「どうした？」

「ボガールだ。メビウスと戦っている！」

「行って来い。だが倒すなよ。撃退だけにとどめておけ。」

「分かっている。」

そう言ってツルギは出て行った。

さてと出来るだけの作業は進めておくか。

ジンカの説得（後書き）

はい。
主人公が本格的に介入し始めました。

それと皆さんにアンケートです。

ウルトラマンヒカリが地球から離れた時にメビウスにブレスレットを託した様に主人公にもパワーアップさせたいんですがどれがいいでしょうか？

1. 遊星っぽいデッキにセイバースタードラゴンとシューティングスタードラゴンを追加で、十代っぽいデッキに各ネオスペーシアンとネオス系融合モンスター
2. エクシーズモンスター
3. モンスターと一体化
4. メビウスとモンスターを融合またはチューニング
5. その他（自由にお書きください。）

怪獣のカード

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

今は補佐官が皆にとある計画を披露していた。

「ミクラスをカスタマイズする？」

ミライが補佐官に聞く。

「アーカイブに記録されている怪獣の特殊能力を摘出し、ミクラスに装填するのだ！」

説明するトリヤマ補佐官。

「またミクラスに会えるんですね！」

ミクラスと聞いて喜ぶコノミさん、それに頷く補佐官。

「それで、その特殊能力って！？」

「スバリ！電流攻撃だ～！」

手振り身振りで説明する補佐官。

「その為に選ばれた怪獣は…」

「エレキングですね！」

テッペイさんが補佐官の先に言う。

「えっと…」

ドキュメントを調べるコノミさん。

「ドキュメントＺＡＴに記録があります。」

「ああ、それは別の固体です。電流攻撃が使えるのはドキュメントＵＧのエレキングです。」

「ドキュメントＺＡＴの方は月光怪獣再生エレキングで火炎攻撃、ＵＧの方が電流攻撃が使えるエレキングですね。」

「ミクラスとエレキングの力を合せれば怖いもの無しですね！」

「さよう、合せて…」

「エレキミクラスというわけです。」

補佐官の部下のマルがしめる。

「お前が言うな！」

「なんで？」

「なんでも！」

漫才をする二人。

「でも、どうして電流なの？」

「あの怪獣、レジストコードボガールの肉片に電流を流して見た所、極度に弛緩する事が分かったんです。」

「電流なんかで、本当に奴を倒せるのか？」

「ミクラスなら出来ますよ！」

顔を膨らませて怒るコノミさん。

そして部屋にミサキ総監代行が来て、ツルギの話になるとリュウさんが暗い顔で出て行った。

俺はツルギに電話した。

『すまない。変身前にいつもの癖で冷たく話してしまった。』

おいおい、それじゃあ原作道理じゃないか…

〜〜その後〜〜

ミサキ総監代行が部屋を出て行くと、補佐官達が小声で話し始めた。

「粒子加速器が、故障した模様です…」

「何！？」

そこに偶然通りかかったジョージさんが、
「粒子加速器！？」
大声でしゃべった。
そして加速器について説明していると、
「加速器そのものを調べれば？」
「いや、１０ＫＭは有る代物ですからね。」
「１０ＫＭだと！？」
「「「「「「…！？」」」」」」」
全員が俺を見て固まる。
「ヒュウ。」
「よしよし、良い子、良い子。」
なぜなら俺が小さなエレキングを抱いているからだ。
「あぁ～可愛い！！」
コノミさんが口を開いた。
「こら！うかつに触るな！」

「大丈夫、危なくないですよ。」

そういいながら歩くコノミさん。

後ろに下がるジョージさん、トリヤマ補佐官、マルさん。

「どういうことだ？」

「はい。漏れ出した少量の分子ミストが相応のナノマシンと結び付き、体積も情報量も少ない、小型エレキングが生まれた、もようです。」

「そうか！ミクラスは一度エレキングに倒されたトラウマでエレキングの分子ミストだけがはじき出されたんだと思います。」

「解説はいいから、速く始末しろ！」

「そんな、この子何も悪いことしてないじゃないですか！」

「けど、何の役にも立たないだろ！」

「あの～別に僕達だ処分しなくても…」

申し訳にくそうにテッペイさんが言うと、

【バニッシュ】

霧となってエレキングが消えた。

って、こっちに来てる～！！

「！？」

しかも、カードにミストが！！

「って、リムエレキング？」

カード化しやがった。

しかも、元のカードは…

「電池メン…」

「か、カードになったわけは知らないけどやっぱり一分が限界なんだ…」

「あ～、よかった、よかった。」

「儚い友情だったな。アディオス。」

すっかり、落ち込んだコノミさんだった。

「ん？」

『きっとたどり着けるさ～♪』

俺の携帯からティガのオープニングが流れた。

「もしもし？」

『こちらツルギ、ボガールの気配を感じた。戦闘態勢に入る。』

「何度も言うが、倒すなよ。」

『わかっている。ッピ！』

切れたか…

「どうしたんだ？」

サコミズ隊長が聞いてくる。

「いえ、何でもありません。」

〜〜食堂〜〜

俺と他の４人は昼食を食べていた。

しかし、急に停電が起きた。

テッペイさんがコンセントを見ると、そこには小型エレキングが居た。

「ごほごほ！」

テッペイさんに釣られてマリアさんもエレキングを見つけ噴出す。

それを止めようとして手を出したジョージさんが感電した。

「どうなっているのかね！？」

「恐らく漏れ出した分子ミストとナノマシンが新しいエレキングを次々と生み出しているんですよ。」

その後、俺とコノミさんが１０体のエレキングの面倒を見て暫くして騒ぎは収まった。

～～その後～～

全員が呼び出しを受けて、モニターの前に集まった。

『ツルガ山山中にボガールが出現、すでに1体の怪獣を捕食済みです。』

「リュウ！マリア！ジンカ！ミライ！それから…」

サコミズ隊長がジョージさんを見ると、チーンと言う音がしそうな位にぶっ倒れているジョージさんと首を横に振るテッペイさんが居た。

「…、コノミ。」

そういって、ミクラスのカプセルを渡す。

「…はい！」

「待ちたまえサコミズ隊長、まだエレキミクラスの運用実験は…」

「出来ます！ケルビムを克服できたミクラスなら！」

「君にそう言われても、」

「責任は私が取りますから。」

「そお？」

「ＧＵＹＳ！サリーゴー！！」

「「「「「「Ｇ．Ｉ．Ｇ！！」」」」」」

やる気満々で答える皆、それから…

「ＧＩＧ－…」

腕を上げて棒読みで答えるジョージさん。雰囲気台無しだ。

～～センサーフェニックスカスタム　内部～～

『ガンフェニックス！スプリット！』

いつものように怪獣の近くで分離するガンフェニックス。

『僕とコノミさんは地上から、リュウさん、マリアさんとジンカ君は空中から！』

「ＯＫ！」

『まかせろ！』

ボガールに突っ込んでいくリュウさん。

「センサービーム！！」

俺はビームを発射し、ボガールに命中する。

しかし、そんなことお構い無しにガンフェニックスを念動力で捕まえるボガール。

『クソ！！』

ブーストするが、距離は縮まない。

「センサービーム！」

連射するが、ボガールはガンフェニックスを放さない。

しかし、ミクラスが登場して思いっきり跳び、ボガールにのしかかる。

そのおかげで念動力への集中が切れて開放されたガンフェニックス。

ただ、エンジンが限界のために着地した。

そのままミクラスとボガールが戦い続けるが、接近しないと電流が使えないので苦戦している。

そして霧となって消えた。

『もう限界時間か？』

『いえ、まだです！』

どうやら、エレキングの他にもデータが使われてるらしい。

「とりあえず、俺も落とされないようにしないと…」

そういって、ビームを撃つが効いている様子が無い…

「くそ！」

そして、どんどん近づいてくるボガール。

しかし、急に動きが止まってなにやら苦しんでいる。

すると、ミクラスが突然現れボガールの尻尾に電流を流していた。

よし！俺は直ぐに無線を切った。

「このタイミングを待っていた！攻撃表示でリムキング召喚！」

リムキング　光　☆１　雷族・チューナー　ＡＴＫ１００　ＤＥＦ１００

『あ、さっきの小さいエレキング！』

『いえ、またあの謎のエネルギー体です。』

「効果発動！ＬＰ１０００払い、手札を2枚捨て、リムトークンを可能な限り召喚！」

ジンカＬＰ４０００→３０００

リムトークン　光　☆１　雷族　ＡＴＫ１００　ＤＥＦ０

リムエレキングと同じトークンが３０体でて来た。

『いっぱい出て来た。』

「いけ、リムキング達！！」

全員がボガールにくっついて電流を流し始める。

そして、更に苦しくなるボガール。

「リムキングの効果は…フィールド上に存在する雷族1体につきフィールドの雷族の攻撃力を５００アップするか。それに、ＬＰを１０００払い、手札を二枚捨てることで可能な限りリムトークンを召喚できるのか。」

つまり、ゲームではリムキングと4体のトークンでトークンとリム自体の攻撃力は２６００になるのか。

しかも、チューナーだから☆5のシンクロ召喚が可能か…

今では、エレキミクラスとリム、トークン３０体……電気が弱点のボガールにはとんでもないダメージだろ。

「これで決まりだな。にしても、痛い…」

LPを4分の1も払ったからな…

「ん？」

ボガールが脱皮しやがった！

「！？やばい！」

ボガールの光弾に当たったリム達とミクラスが消えた！

しかも、ボガールはカンカンじゃないか！！

更に俺に向かって光弾を吐く。

「っち、トラップ発動！魔法の筒（マジックシリンダー）！！」

光弾を魔法の筒が跳ね返す。

そのままボガールに当たり、ボガールは不利を悟り逃げていった。

「あ、メビウスの出番無しか…」

まあ、こんな日も有るよ。うん。

その後、俺はガンフェニックスを上からつるしながら、帰還した。

怪獣のカード（後書き）

すみません。今回はメビウス無しの回でした。
でも、弱点の電撃をアレだけ喰らって置いて自分の光弾喰らって逃げない奴いないと思いますよ。……多分。

アンケートはまだ続いてます。よければお答えください。

次は久しぶりのデュエル回です。
予定では、ミライ対テッペイさんです。

それでは！

博士のデュエル（前書き）

今回の話は原作の３０話の後の話です。
なので皆の前で光の星のカードを使っています。

博士のデュエル

～～とある先の未来　３０話（ミライの正体がばれた）の後～～

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

「さて、デッキ調整終了～！」

俺はあこがれていたオリカデッキを作る為、この世界のカードでデッキを組んでいた。

中にはミライがくれた別宇宙のウルトラマンや怪獣のカードがある。

「さて相手を見つけたいがサコミズ隊長は出かけてるし、ミライは……」

「「デュエル！！」」

「まあ、見ていくか。」

デッキ名：命がけの守護者　（ミライ）ＶＳ大・大・大怪獣！　（テッペイ）

先攻はテッペイさんか。

「僕のターンですね！ドロー！僕は攻撃表示で【古代怪獣ツインテール】を召喚！効果発動！【地底怪獣グドン】をデッキから手札に加えます！」

古代怪獣ツインテール　地属性　☆４　地底族　ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１６００

地底海獣グドン　地属性　☆４　地底族　ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１０００

「更に魔法発動【突然の地震】！地底族の怪獣と名のつく☆４以下のモンスターを特殊召喚します！グドンを召喚します！」

突然の地震　魔法　効果：怪獣と名のつくレベル４以下の地底族モンスター１体を手札から特殊召喚できる。

「カードを２枚伏せてターンエンドです。」

「僕のターン！ドロー！手札から【ウルトラマンドーロ】を攻撃表示で召喚して効果発動！１枚ドローします！更に、引いたカードは光族戦士モンスターの【ウルトラマンティガＬＶ８】！よってドーロを守備表示に変更します！」

「守備力２０００か…」

「まだです！ジンカさんがくれた二重召喚（デュアルサモン）を発動！もう一度、通常召喚を行います！ドーロをリリースして【ウルトラマンティガＬＶ６】を召喚します！」

「攻撃力２４００！」

「バトルです！ティガでツインテールに攻撃！」

「トラップを発動します！【捕食】！怪獣と名のつくモンスターを

２体リリースして発動します！デッキから【高次元捕食体ボガール】を召喚し、発動時にリリースしたモンスター１体を選択してその攻撃力分ＬＰを回復します！僕が選ぶのはグドン！」

テッペイ　ＬＰ４０００→５８００

捕食　通常罠　効果：フィールドに存在する怪獣と名のつくモンスター２体をリリースして発動する。デッキから【高次元捕食体ボガール】を召喚し、リリースしたモンスター１体の攻撃力分ＬＰを回復させる。

高次元捕食体ボガール　闇属性　☆１０　異空間族　ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ２３００

「っく！僕はカードを一枚伏せて、ターンエンド！」

ボガールか……効果が想像できちゃうんですけどー。

「僕のターン！ドロー！僕は【高次元捕食獣レッサーボガール　ミクロ】を召喚します！ボガールがフィールドに居る時、召喚したモンスターは破壊され、ボガールの攻撃力は２００ポイントアップしますが、ボガールの効果で墓地に送られたレッサーボガールはボガールの攻撃力を１０００アップさせます！」

ボガール　ＡＴＫ２８００→３０００→４０００

「攻撃力４０００！？」

「ただし、ボガールは攻撃力が４００ポイント以上上がったターンは攻撃できません。ターンエンド。」

「僕のターン！ドロー！（この手札なら！）伏せカード発動！【緊急出動】！ＬＰを半分払い、ウルトラと名のつくモンスター１体を特殊召喚します！来い！【ウルトラマンネクサス　ジェネッス】！更にＬＰが半分の時、ティガＬＶ６はティガＬＶ８にレベルアップします！」

ウルトラマンティガＬＶ８　光属性　☆８　ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ２５００

「ジェネッスの効果発動！デッキに戻して【ウルトラマンネクサス　ジェネッスブルー】をデッキから特殊召喚！そして、ジェネッスブルーの効果を発動！テッペイさんの伏せカードを破壊します！」

「あ、【ウルトラゾーン】が！」

ウルトラゾーン　通常罠　効果：モンスターの攻撃時に発動できる。攻撃モンスターを除外する。

自分のモンスターにも使える次元幽閉じゃねえか！

「ボガールは除外すればエンドフェイズ時に攻撃力が１０００アップして戻ってくるのに……」

強っ！！

「更に、ティガの効果発動！デッキに戻して、デッキから【グリッターティガ】を特殊召喚します！」

グリッターティガ　光属性　☆１０　ＡＴＫ４５００　ＤＥＦ４０

００

「４５００！？」

おい！作者！！自分がティガ好きだからって贔屓すんな！（ジンカ！メタ発言するな！）

「グリッターを召喚したターンのバトルフェイズ終了時に僕はデッキからカードを十枚捨てなければなりません。攻撃表示で【ウルトラマンダイナＬＶ４】を召喚します！」

ウルトラマンダイナＬＶ４　光族　☆４　ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１６００

「バトル！グリッターティガでボガールに攻撃！グリッターゼペリオン光線！」

テッペイ　ＬＰ５８００→５３００

「ジェネッスブルーとダイナで攻撃します！」

テッペイ　ＬＰ５３００→２５００→７００

「っく！でも、まだＬＰが残っています！」

「メインフェイズ２に移る前に、デッキの上からカードを１０枚墓地に送ります。」

ミライ　デッキ数：３２→２２

「でも、これで終わりです。手札の魔法発動！【スペシウム光線】！」

スペシウム光線　通常魔法　効果：フィールドのウルトラと名のつくモンスター１体につき３００ポイントのダメージを与える。

「えぇ～～！？」

テッペイ　ＬＰ７００→－２００

「まさか、バーンで決められるとはな。」

「あれ、ジンカさん見ていたんですか。」

「ああ、いい勝負だったな。」

「ですけど、負けちゃいましたから今日のカレーは僕が払いますね。」

「なんだ、賭けしてたのか。」

「はい！今月ちょっとピンチだったもので…（光の国から地球へのお届け物は安くないんですよ）」

「ミライがピンチって何か想像できないな…」

「僕もです。ウルトラマンって隠してなかったらかなりのお金が入ると思うんですけどね・・・」

「それでも、お金より地球を大切にしたいんですよ。僕は。」

「おお、良い事言うじゃん！さすがウルトラマン！」

こうして笑いながら、残り少ない日々を過ごしていた俺達だった。

博士のデュエル（後書き）

と言う訳で、未来での話でした。

オリカ紹介　これまでのカード（前書き）

すこし修正しています。

オリカ紹介　これまでのカード

魔法

ウルトラサイン　速攻魔法　効果：このカードのコントローラーが以下の効果から一つ選んで発動する。
・デッキからウルトラと名のつくモンスターを１枚手札に加える。
・手札からウルトラと名のつくモンスターを１体特殊召喚する。

ペンシル爆弾　通常魔法　効果：このカードは通常召喚を行っていないメインフェイズ１に発動できる。
相手モンスターを１体選択して破壊する。破壊したモンスターのレベル×４００ポイントのダメージを相手に与える。このカード使用した時残りのフェイズをスキップする。

メテオール解禁！　速攻魔法　効果：墓地に存在する機械族モンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップさせ、攻撃表示で可能な限り特殊召喚する。

最後の特攻　通常魔法　効果：デッキからモンスターを１体を召喚条件を無視して特殊召喚する。
このターンのバトルフェイズ時にこのコントローラーＬＰはゼロとなる。

突然の地震　通常魔法　効果：手札の怪獣と名のつくレベル４以下の地底族モンスターを１体、特殊召喚する。

スペシウム光線　通常魔法　効果：フィールドのウルトラと名のつくモンスター１枚につき、相手に３００ポイントのダメージを与え

る。

罠

ウルトラの母の奇跡　通常罠　効果：相手のカードの効果で破壊されたウルトラと名のつくモンスターを次のバトルフェイズ終了時に墓地から特殊召喚する。

緊急出動　通常罠　効果：ＬＰを半分払い発動する。手札のウルトラと名のつくモンスターを特殊召喚する。

後退射撃　通常魔法　効果：自分フィールドの機械族モンスターが戦闘を行う時に発動できる。戦闘を無効にし、そのモンスターを手札に戻して相手に５００ポイントのダメージを与える。

捕食　通常罠　効果：怪獣と名のつくモンスターを2体リリースして発動する。デッキから高次元捕食体ボガールを特殊召喚し、発動時にリリースしたモンスター1体を選択してその攻撃力分ＬＰを回復する。

ウルトラゾーン　通常罠　効果：モンスターの攻撃時に発動できる。攻撃モンスターを除外する。

モンスター

ジェットビートル　風属性　☆３　機械族　ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ１０００
このカードの通常召喚に成功した時、手札からジョットビートルを

特殊召喚できる。
このカードを手札から特殊召喚した時、相手のＬＰに５００ポイントのダメージを相手に与える。

メガキャノンチェスター　地属性　☆７　機械族　ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ２０００
バトルフェイズをスキップすることで、相手のゾーンを一つ選択しそのゾーンのカード全てを破壊する。

リムエレキング　光属性　☆１　雷族・チューナー　ＡＴＫ１００　ＤＥＦ１００
フィールド上に存在する雷族１体につきフィールドの雷族の攻撃力を５００アップする。ＬＰを１０００払い、手札を二枚捨てることで可能な限りリムトークンを召喚する。

ウルトラマンティガＬＶ８　光属性　☆８　ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ２５００
このモンスターは通常召喚できない。
自分のＬＰが初期ＬＰの半分以下の時このカードをデッキ戻して、デッキから【グリッターティガ】を特殊召喚する。

グリッターティガ　光属性　☆１０　ＡＴＫ４５００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは通常召喚できない。
このモンスターはウルトラマンティガＬＶ８の効果でのみ特殊召喚できる。
このモンスターを召喚したターンのバトルフェイズ終了時にプレイヤーはデッキからカードを十枚捨てる。
このモンスターは魔法、罠の効果を受けない。

ウルトラマンダイナＬＶ４　光族　☆４　ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１６００
エンドフェイズ時にこのモンスターを墓地に送って、デッキ・手札からウルトラマンダイナＬＶ６を特殊召喚できる。

高次元捕食体ボガール　闇属性　☆１０　異空間族　ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ２３００
このモンスターは通常召喚できない。
このモンスターは捕食の効果でのみ特殊召喚できる。
このモンスターがフィールドに存在する限り、自分フィールドに召喚されたモンスターは墓地に送られる。上記の効果で墓地に送られたモンスター１体につきこのモンスターの攻撃力を２００アップする。
このモンスターがフィールドを離れた時、このモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える。

高次元捕食獣レッサーボガール　ミクロ　闇属性　☆３　異空間族　ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ１０００
このモンスターが高次元捕食体と名のつくモンスターの効果で墓地に送られた場合、フィールドに存在する高次元捕食体と名のつくモンスターの攻撃力を１０００アップさせる。

古代怪獣ツインテール　地属性　☆４　地底族　ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１６００
このモンスターの召喚に成功した時、地底怪獣グドンをデッキから手札に加えることが出来る。

地底海獣グドン　地属性　☆４　地底族　ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１０００
フレーバーテキスト：

古代怪獣ツインテールを餌とする怪獣。
手についている鞭の速さは人間では捉えられない。

オリカ紹介　これまでのカード（後書き）

今回の説明はこれで終了です。
それにしてもグリッターティガは強いな～。
まあ、ウルトラマンキングとかウルトラの父のカードはもっと強くする予定ですけどね。

喧嘩の後

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

メインルームで会議中のクルー達。

するとモニターからミサキ総監代行が現れた。

『ＧＵＹＳ総本部からボガールについて新たな情報です。』

「良い知らせですか？それとも…」

『悪い知らせです。ボガールは他の怪獣を食べる度に、体内のエネルギーを増幅している事が判明しました。』

「何ですって！？つ、つまり…」

不安げな声を上げる補佐官。

『エネルギーに引火した瞬間、大爆発を起こします。』

「大爆発！？」

それに驚くリュウさん。

「それって、どれくらいの威力なんですか？」

マリアさんが冷静に聞く。

『推定で、1，9ギガトン。仮に東京の中心部で爆発した際の被害シュミレーションです。』

モニターのシュミレーションには東京に隣接している県の半分以上が巻き込まれている。

これを見たＧＵＹＳクルーに衝撃が走る。

『爆発後、数分で半径１００ＫＭ以内が壊滅します。』

「うそ…」

「ボガールは移動する火薬庫と同じだ…」

「下手な攻撃はできない、か…」

「最悪…」

皆は絶望してる。

「あの謎のエネルギー体はまだ良いですけど……」

「でもツルギが現れたらどうする？奴もボガールを狙っているみたいだし…」

この言葉にリュウさんが呟く。

「俺が止めてやる…」

そして、リュウさんはメインルームを出て行こうとしてジョージさんに肩をつかまれた。

「どこ行く？ミューティング中だぞ？」

「…放せ…」

再び出て行こうとするリュウさんを再度ジョージさんが掴む。

「待てって！最近可笑しいぜ。何隠してる？言えよ。」

「お前らには関係ない事だ！」

そして――――――

「ふざっけんな！！俺達はチームだってのがお前の信条だったんじゃねぇのか！？」

――――――喧嘩が始まる。

「何？やんのか！？」

「上等だこの野郎！！」

「ちょっと！！」

「二人とも落ち着いて！」

皆が止めようとする中、俺は二人の間に立った。

俺の我慢も限界だ！

「いい加減にしろ！」

「邪魔だ！」

そう言って、俺を押すとするリュウの手を掴んでから、何時も言いたかったことを叫んだ。

「いい加減にしろつってんだろうが！！何時も何時も喧嘩しやがって！」

口調が変わっているが気にしていられない。

「なんだよジンカ！てめぇもやんのか！？」

「うるせーんだよ！！ミライともジョージとも何時も怒鳴り合がって！今は会議中だぞ！お前が託されたＧＵＹＳは喧嘩ばっかで、やることしねぇチームなのかよ！？」

「てめぇ！ＧＵＹＳを馬鹿にすんのか！？」

「お前はＧＵＹＳを汚してんだろうが！俺達はチームだって言っただろうが！何で俺達に何も話さねぇんだよ！！」

「……俺には！俺にはセリザワ隊長の為以外にＧＵＹＳで頑張る意味なんてねぇんだよ！！」

そして出て行くリュウ。

「……私が行きます。後はよろしくお願いします。」

それにサコミズ隊長が出て行った。

〜〜その後〜〜

「隊長…行っちゃいましたね。」

そう呟くコノミさん。

「関係有りません。皆さん座って。ミサキ総監代行、ボガールへの作戦会議を続けましょう。」

そして、会議を続けようとする俺。

「こら、補佐官である私を差し置いてこの場を仕切るな！」

『…それで、作戦とは？』

「無視ですか！？」

嘆く補佐官。

「ボガールに対して有効なメテオールは？」

『只今、総本部が対策中です。』

「俺としてはこの前、俺が休暇のときに使ったらしい重力反動盤と

キャプチャーキューブで宇宙空間に放り出して叩くいいと思いますが。」

『報告しておきましょう。』

「他の皆は？」

「ジンカ君、口調変えないんですね。」

「もう意味ないですから。」

「僕はボガールを凍結させる様なメテオールがいいんじゃないでしょうか？」

『そのようなメテオールは存在しませんし、これから作っても間に合いません。』

「他のメテオールは？」

『ほとんどが攻撃用なのですが、磁場フィールド発生装置が有力らしいです。』

「磁場で閉じ込めて、圧倒的な攻撃で仕留める…しかし、もしメビウスが現れたらどうするんですか？」

『まだ検討中です。』

「そうですか…」

すると警報が鳴る。

「っち！コノミさんは隊長に連絡。恐らく近くにリュウさんもいるだろう。テッペイさんは怪獣の過去データと照合を！」

「はい！」

「ミライとジョージ、マリアさんはガンフェニックスで出撃！俺もセンサーフェニックスに乗る！」

「はい！（了解！）（ＯＫ、アミーゴ！）」

「怪獣出現エリアは？」

「フジキタシ第３造成地です！グドンとツインテールです！」

皆を指揮する俺。

「ＧＵＹＳサリーゴー！」

「「「「「Ｇ．Ｉ．Ｇ！！」」」」」

そしてそれに答えてくれる皆。

「なんで、年下のジンカ君があそこまで仕切れるんでしょうね？」

「私が知るか！」

煩いぞ、そこの凸凹コンビ！！

〜〜センサーフェニックス内部〜〜

目的地近くで無線が鳴り響いた。

「こちら、センサーフェニックス！どうかしたか？」

『ツインテールとグドンをボガールが捕食しました！気をつけてください！』

『メビウスが苦戦した2体をたった数分で！？』

「怯むな！とりあえず足止めだ！！」

「「「G．I．G！！」」」

そう言って皆、ボガールの下を狙う。

『っくそ！どうすりゃ良い！？』

（とりあえず、異次元に飛ばしてみるか？）

いつもの様に無線をきる。

「来い！異次元の女戦士！！」

現れる金髪の女性。

『謎のエネルギー体です！』

「いけ！ディメンションスラッシュ！」

そして、ボガールに剣を挿すと、謎の黒い穴がボガールの下に現れる。

『何だありゃぁ！？』

『何処かへの転送するみたいです！』

「どうやらボガールを遠くへ運ぶみたいだぜ？」

しかし、黒い穴にボガールは吸い込まれたが数秒でまた現れた。

「くそ！テッペイさん！コノミさん！」

『『はい！！』』

すると、エレキミクラスが現れた。

「ミクラスのサポートに回るぞ！」

『『『G．I．G！！』』』

そして、俺達のビームで怯んだ隙にミクラスが近づいて電流を流し、ボガールは倒れた。

（まだだ。これからが本番だ！）

そう、ボガールはゲームのラスボスと同じ。

ボガールは脱皮し、中からボガールの変種体ボガールモンスが現れ

た。

これに怯えたミクラスだが、何とか攻撃しようとするが近づく前に光線を浴びせられ連続攻撃の前に消えていった。

『電流攻撃でも倒せない！！もうボガールを倒す手段が！』

「まだだ、あきらめるな！補佐官！！」

『め、メテオール使用を許可する！せ、制限時間は一分！』

『『「メテオール解禁！！パーミッションツーシフト！！マニューバム！！」』』

そう言ってレバーを下げ、マニューバモードに移行する！

「一斉攻撃だ！センサーツーショット！！」

『スペシュウム弾頭弾！』

『ヴァリアブルパルサー！』

全機体からの一斉攻撃。これには流石のボガールモンスも怯んだ。

しかし、モンスは下にいるテッペイやコノミを狙い始めた。

「くそ！来い！リムエレキング達よ！」

この前と同じ31のリムエレキングがモンスに引っ付くが、全てなぎ払われて消えていく。

そいして、ついにメビウスが現れた。

（ミライ……！！）

そして、戦闘が始まるがモンスの意外な攻撃力と強靭さ、更には止めがさせないもどかしさで遣られそうになるが、其処にガンスピーダーの援護とリュウの渇で立ち上がる。

『立ち上がれよウルトラマン！そんなでかい図体して、この星守るつもりなら根性見せやがれ！！』

『あの熱血馬鹿！』

『遅いぜ！アミーゴ！』

「喧嘩しに帰ってきたわけじゃなさそうだな！」

皆が喜び、俺もつい軽口を叩く。

『うるせーな！待たせて悪かったな！』

怒鳴りながらも嬉しそうなリュウ。

そして、メビウスも反撃に出る。

狙うのは、首！

『リュウ！地上からメビウスの援護に回れ！』

『G．I．G！』

「隊長！遅いですよ！」

『本当ですよ！もうちょっとで全部ジンカ君が指揮っちゃう所でしたよ！』

『今度から、ジンカに任せて休暇とろうかな？』

「帰ってくるころには俺は出世してますよ！隊長に！」

『生意気な！』

軽口を叩く俺達。

その後はメビウスの投げ技のオンパレード。

しかし、メビウスの持ったモンスにツルギが光線技を放つ。

ギリギリで投げて避けたが、その後はツルギとメビウスの戦闘になり、モンスは逃げ出し二体の巨人は消えていった。

喧嘩の後（後書き）

何かジンカが仮隊長になりました。

最近文が長い気がするけど、普段が短いだけだよね…多分そうだよね……

作戦への追加

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

今回もメインルームでの会議で始まる。

「ボガール殲滅作戦！？」

ジョージの疑問にミサキ総監代行が答える。

「この太平洋の無人島が決戦の場に選ばれました。
島の周縁部には磁場フィールドを発生させる六つのパラボラが設置されています。
この島の中心部にボガールを追い込みパラボラから磁場を放射し、フィールド状に包み込みます。」

納得するジョージさん。

「つまり、バリアーの檻に閉じ込めるわけか！」

「そうです。」

ミサキ総監代行が説明していると、後ろでコソコソ会話を始める補佐官とその部下。

「この様な重要な作戦をどうして私に説明させんのだ！？」

それはアンタあれだよ。

「それはこの様な重要な作戦だからではないでしょうか？」

そうそうそれそれ！

「あ、なるほど！」

な、納得しただろ！

「って、おい！」

ノリツッコミうまいね～、でも怒られても知らないぞ。

「えへん！」

咳払いをするミサキ総監代行。

それを笑って誤魔化す補佐官…きも！

「さて、構内には千二百ミリシンクロトロン砲が待機、ボガールをこの砲撃によって仕留めます。

倒されたボガールは直ぐに大爆発を起こします。

しかし、その爆発エネルギーはこの磁場フィールドによって遮られ周辺には一切、影響を与えません。」

納得するテッペイさん。

「なるほど…」

そして説明が終わると同時に、モニターが消える。

「作戦は以上。何か質問は？」

隊長が質問した。

「作戦の指揮はＧＵＹＳオーシャンが？」

「はい。クルーＧＵＹＳジャパンは作戦のサポートに回ってもらいます。」

するとコノミさんが立ち上がった。

「ちょっと待ってください！メビウスが現れた場合はどうなるんですか！？」

それに賛同するジョージ。

「そうだよ！メビウスは必ず現れる。」

「メビウスがこのフィールド内に居たら、ボガールと一緒に爆発しちゃうじゃないですか！」

そして、呟く様にリュウが言う。

「ツルギもだ…、奴も必ず現れる…」

暫くの沈黙の後、テッペイさんが聞く。

「何か対策は！？」

首を横に振るミサキ総監代行。

「無いわ…」

それに驚くマリアさん。

「無いって、そんな！！」

「メビウスを犠牲にしても良いって言うんですか！？」

それに冷静を装うミサキ総監代行。

「今は！人類への危機の解消が、優先されるの。」

それを聞いて、黙ったまま出て行くリュウ、それを追いかけるミライ。

しかし、隊長の掛け声により沈黙は破られた。

「さ！どうしようか？」

意味が分からない皆。

半ベソ状態のコノミさんが聞く。

「どうするって？」

それに歩きながら答える。

「今回、我々は作戦のサポートを担当するわけだ。ね。」
肩に手を置かれたテッペイさん。
「はぁ。」
「希望を探すことも、サポートの一つ。でしょ？」
呟くコノミさん。
「希望……」
考えながら呟くジョージ。
「希望…」
顔が明るくなるマリアさん。
「希望…！」
考え込むテッペイさん。
「希望。」
そして、俺。
「希望」
そして、それを見て満足したかのようなミサキ総監代行。

〜〜その後〜〜

皆は早速作業に取り掛かった。

何度も走って次から次へとテッペイさんに資料を持てくるジョージ。

隊長への資料を取りに走るマリアさん。

パソコンに向かい合うテッペイさん。

ドキュメントを調べつくすコノミさん。

マケット怪獣方面から調べる俺。

話し合うジョージとマリアさん。

３時間後疲れて寝始めるジョージさん。

更に２０分後にマリアさんが鉛筆持ったまま寝始める。

ウトウトし始めてダンダン寝ていくコノミさん。

悪戦苦闘中のテッペイさんは寝ないように必死。

其処にコーヒーを持ってくるサコミズ隊長。

俺は欠伸を噛み殺しながらも、怪獣のドキュメントを漁りつくして人目を気にして、怪獣のデータをフリーズロックにインストールする。

なお、フリーズロックはメテオールディスプレイに差し込むカプセル型だ。
これを光線と共に怪獣に当てれば怪獣があっという間に凍りつく代物だ。

〜〜その後〜〜

後から来たリュウとミライ（サボり常習犯二人）に説明することになった。

「それでは、ボガール殲滅作戦に置ける、我々ＧＵＹＳジャパンとしての作戦を説明します。」

「ＧＵＹＳジャパンとしての作戦？」

ワケが分かっていないリュウ。

「いいから黙って聞け！」

しぶしぶながらも黙って座るリュウ。

「磁場フィールドで構成されるバリアーは、外側からキャプチャーキューブを浴びせ続ければ、一定時間穴を開けることが可能です。
そこで、ガンローダーにキャプチャーキューブ放射機能を搭載、バリアーの檻の外に待機させます。
檻の中にはボガールと一緒にメビウスとツルギ。
我々はＧＵＹＳオーシャンの作戦経過を見極め、ボガールが爆発す

る前にキャプチャーキューブを照射。
バリアーの檻に穴を開ける。この穴からメビウス、そしてツルギを救出します。」
不思議に思うリュウ。
「救出？」
説明を続けるテッペイさん。
「…救出と同時に穴を塞ぎ、ボガールの爆発エネルギーだけを封じ込める。ただし、これが行えるのは…」
「メテオール限界時間の１分間。」
コノミさんが言う。
「でも、１分間でも希望が有るんです。」
そして賛同するジョージ。
「その通りだ！」
何時もに無く動揺してるリュウ。
「でも、そんな勝手なことをしたら…」
その言葉を隊長が遮る。
「どうして？これも立派な、作戦のサポートでしょ？」

テッペイさんが言う。
「今まで一緒に戦ってきたメビウスを見殺しには出来ない。」
続けてコノミさん。
「人類の敵は、あくまでもボガールです。」
俺が続けて、
「ボガールを倒しても、」
マリアさんが紡ぎ、
「失われる別の命がるとしたなら…」
ジョージが締める。
「俺達がいる意味が無い。」
それでも不安なリュウ。
「でも…ツルギは……」
しかし、ミライは明るい声で言う。
「ボガールを倒せば、セリザワ前隊長の体をツルギは開放します。」
テッペイさんが言う。

「…希望にかけましょう。」

それに頷く皆。

そして泣くリュウ。

「皆…セリザワ隊長にあった事もないのに…」

そして、笑うマリアさん。

「あ、ほら泣いてる！」

笑顔でハンカチを渡すコノミさん。

「はい！」

「…バカ！泣かねぇよ！泣かねぇけど…皆…ありがとう……！」

そして、手を皆で重ねる。

テッペイさんが考え始める。

「作戦名は…えっと……」

ミライが言う。

「ＧＵＹＳの誇りに掛けて！」

英語に直すマリアさん。

「プライド　ＯＦ　ＧＵＹＳね！」

そして皆で胸に作戦名を刻む。

「「「「「「プライド　ＯＦ　ＧＵＹＳ　！！！！！」」」」」」

待ってろよ！ボガール！！

作戦への追加（後書き）

長くなったのでここら辺で一回きります。

前回、ツルギがメビウスを攻撃したのはメビウスの実力を測るためです。
光線も気づく少し前に態と出しました。

決戦の光（前書き）

ボガール編、決着！

決戦の光

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

決意を固めた俺達に警報が鳴り響いた。

すぐさま調べるコノミさん。

「ボガールが出現しました！」

「どこに！？」

「…フェニックスネストに接近してきます！」

皆が驚く中、ミライは耳を集中させていた。

そして、皆の前でこう言った。

「ガンウィンガーで奴をポイントまで誘導します！」

リュウが代わりにやろうとする。

「誘導なら俺が…」

しかし、隊長は違った。

「否、リュウにはメビウスとツルギが出現した場合の救出作戦に加

わってもらう。
ミライ、それとサポートにジンカだ。ＧＵＹＳサリーゴー！」
「「Ｇ．Ｉ．Ｇ！！」」
〜〜ガンウィンガー内部〜〜
そういや俺、初めての戦闘機搭乗だな。
するとミライが呟くように言う。
「ジンカさん、皆、ありがとう。」
俺は照れくさくなった。
「バカ、そういうのは勝ってから言えよ！」
ミライは嬉しそうに返事をする。
「はい！」
ミライはレバーを引いた。
「ガンウィンガー、バナーオン！！」
そして、ボガールを発見し暫く回りを飛ぶ。
「ついて来い！決着を着けよう！！」

そして、島が見え始めた。

「作戦エリアに到着。着陸します。」

その後、着陸し終わると無線からコノミさんが報告する。

『ボガール、無事作戦ポイントに到着。
ミライ君、ジンカ君。迎えに行くまでその海岸で待機。動いちゃだめですよ？』

「G．I．G！」

そう言ってミライは無線を切った。

そして暗い顔をするミライ。

「コノミさん…ごめんなさい……」

「何言ってんだ。さっさと行って、さっさと帰って来い！」

「…はい！」

そう言って、島の中心部にミライが向かった。

「次はお前だ。ツルギ。」

そういうと、岩から出てくるツルギ。

「完成したのか？」

「ああ、これをナイトブレスに流し込めばいい。」

ツルギはブレスを出現させた。

「じっとしてろよ！」

【メテオールインストール】

俺はディスプレイにフリーズロックのカプセルを挿して、ブレスレットに撃った。

「これでよし。ただし、フリーズナイトシュートが撃てるのは3回だけだ。」

「分かった。」

「じゃあ、お前も行って来い。」

そういうと島の中心部にツルギは向かった。

「俺もそろそろ行くか。」

後ろにDホイールを出現させた。

「1話ぶりだな～。」

全然使わなかったからな。

「まあ、よろしく頼むぜ。装備魔法発動！迷彩アーマー！」

そして、透明になる俺とDホイール。

「とりあえず、この吸着機能で磁場の真上に上るか。」

めちゃくちゃなバイクだ。

そう思いながらも、磁場フィールドに向かって走り出した。

磁場フィールドではボガールが磁場に向かって、攻撃していた。

しかし、磁場フィールドからは抜け出せない。

その後、シンクロトロン砲が発射されたが怯むだけだった。

そして、全てのトロン砲が破壊された。

そこにメビウスとツルギが現れて、交互に、時には同時に攻撃を繰り出す。

メビウスに攻撃するボガール、その攻撃を避けて後ろに下がるメビウス。

ツルギが前にでて攻撃し、違う方向からメビウスがボガールを掴む。

やがて引き剥がされ、ツルギが攻める。

ツルギが倒れ、攻撃される前にメビウスが攻撃する。

暫く、戦い続けて隙が出来たボガールにツルギがフリーズナイトシュートを撃つ。

どうやら戦う前に、説明したらしくメビウスは攻撃しない。

「デュァァ！！ハァ！！」

そして発射された光線に当たったボガールは凍りついた。

『ボガールを完全に凍結させました！』

『でも、生体反応が増えてる！？』

「うそだろ……」

ボガールモンスは凍りついた瞬間、赤く光だし其処にはボガールモンスが二体居た。

『まさか、ボガールは死んだ時その肉片から新たな固体を生み出す存在なのか！？』

「しまった！」

思えば俺がテレビで見た弱点はあくまで電流のみ。確証がない筈なのに油断した！

「くっそ！ＬＶ３ジャンクウォリアーとＬＶ３氷結界の術者をチューニング！こい！スターダストドラゴン！！」

俺は待機させていた二体でシンクロ召喚を行った。

「行け！シューティングソニック！」

眩い光のブレスがボガールモンスに命中する。
どうやら、生まれたばかりの固体の生命力はほとんどなく、スターダストの攻撃で粉砕された。
「いけ！ディクテムサンクチェアリ！！」
爆発寸前のボガールをスターダストが光と翼で包み、爆発を止めた。
（スターダストは直ぐ復活するから大丈夫だが…）
俺が考えていると微かに飛び散った肉片をもう1体のボガールモンスが喰らう。
「何！？」
喰った後に出てきたのは、ボガールモンスの首を三つ持つ化け物だった。
体も凍る前のボガールモンスよりデカイ。
「くそ！（スターダストさえ死守すれば、爆発エネルギーは防げる筈だ！）」
再び光と共に現れたスターダストは直ぐさま下がったり、二人の巨人は敵の前に立った。
また交互に攻撃していくが、大して効いてない。

「シューティングソニック！」

スターダストの攻撃を喰らうも大して効いては居ない。

無線からリュウの声が聞こえる。

『くそ！どうすりゃいいんだ！』

不安なコノミさん。

『このままじゃ、メビウス達が…』

テッペイさんは考え続ける。

『ミクラスは…駄目だ。間に合わない！』

しかし、その不安は続かなかった。

『あきらめるな！！』

隊長の怒鳴り声だった。

『彼らが戦っているんだ。私達はまだ希望を失ってはいけない！』

隊長……

「希望か…」

そういや、俺の転生後のデッキには入ってなかったな。

「デェスティニードロー……やってみるか！」
俺はデッキの上に希望と一緒に腕を乗せた。
「これが俺の……ドローだぁぁぁぁぁ！！」
俺が引いたカードは、光と共にその本来の姿になった。
そう、俺のデッキに入っていた筈のカードは別のカードと交換されていた。
そのカードが今、俺に希望をくれた！
「伏せカードオープン！エンジェルリフト！墓地からスターダストシャウロンを特殊召喚！
更に攻撃表示で救世竜セイヴァードラゴンを召喚！」
小さな2体の竜がスターダストと並ぶ。
それがどうした、とでも言いたい様に吼えるボガールモンス。
「慌てるな！
ＬＶ１スターダストシャウロンとＬＶ８スターダストドラゴンにＬＶ１セイヴァードラゴンをチューニング！！
１０個の希望が光る時、救世の竜が現れる！繋げ合う星となれ！シンクロ召喚！
光輝け！セイヴァースタードラゴン！」
光を放ちながら翼を広げて現れるセイヴァースタードラゴン。

「行くぞ！セイヴァースタードラゴンの効果！サプリメーション・コピー！」

無効には出来ないが、コピーなら出来る！

セイヴァースタードラゴンが三体に増える。ただし、現れた2体は光に包まれ半透明だ。

「いけ！セイヴァースタードラゴン！シューティング・ブラスター・ソニック・ファースト！」

半透明はスタードラゴンがボガールモンスに突っ込み、頭を一つ消滅させる。

「シューティング・ブラスター・ソニック・セカンド！」

もう1体が突っ込み、もう一方の頭を消滅させた。

「止めだ！」

メビウスとツルギとスタードラゴンは構える。

「セイヴァー・トライアングル・インフィニット！」

三つの光線が一つになり、希望となってボガールモンスに向かう。

ボガールモンスは光線を出すも、三つの光の前には歯が立たなかった。

そして、ボガールモンスに直撃して、ボガールモンスは敗れ去った。

そして、セイヴァースタードラゴンは光となって消えた。
そして、コノミさんの声。
『メビウス達が勝ったんですね！』
しかし、テッペイさんは。
『ボガールモンスの体内エネルギーが急速増上！危険な状態です！』
そして、マリアさんが叫ぶ。
『リュウ！ジョージ！出番よ！』
隊長も許可を出す。
『メテオール解禁！』
そして、放射を開始する。
『キャプチャーキューブ！放射！』
磁場フィールドに穴が開き始める。
『今だ！その穴から脱出しろ！』
頷くメビウス、そしてツルギも頷き穴へと飛んでいった。
そして、1分後ボガールモンスは爆発を起こしたが磁場フィールド

によって喰い止められた。

『やった！！』

『よっしゃー！』

『ナイスだ、アミーゴ！』

『やりましたよ！！』

皆が喜び合った。

もちろん俺もだ。

「こちらジンカ。皆さんお疲れ様です！ミライとツルギを連れてそちらに帰還したいので迎えをお願いします！」

『ツルギも…、セリザワ隊長も居るのか…？……了解！』

こうして、俺の介入によりハッピーエンドを向かえた決戦は、幕を下ろした。

決戦の光（後書き）

ボガール編終了！

この後は、何話か書いてから超獣編に入る予定です。

逆流のココロ

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

俺達は、急患を運んでいた。

「しっかりしてくれ！セリザワ隊長！！」

「あと少しですから、頑張ってください！」

そう、セリザワ隊長ことツルギだ。

あの作戦の後、ガンローダーに積まれていた燃料タンクをウィンガーに入れてフェニックスネストに帰還した俺達。

しかし、ツルギの体は予想以上に酷かったの突然倒れる。

そして、俺達は今急いでＧＵＹＳの救護施設に運び入れた。

入れた後は、集中手術室に入ったが回復はしたが意識が戻らないそうだ。

しかし、銀十字隊の隊長、ウルトラの母がセリザワ前隊長の体ごと治療するために現れた。

幸い、ツルギは１週間ぐらいで目覚めるらしい。

〜〜それから数日後〜〜

今日は１週間に一度の共同訓練の日。

「１つ！腹ペコのまま学校に行かぬこと！
１つ！天気のいい日に布団を干すこと！
１つ！道を歩くときには車に気をつけること！
……」

基地の近くの公園を１０ＫＭ以上をリュウの怒鳴り声と共にクルー達は走っていた。

「うっ…はぁ…もう無理……はぁ……もう駄目……」

しかし、ようやく３ＫＭの所でテッペイさんがダウン。

駆け寄るクルー達。

しかし、無情にもミライのディスプレイから呼び出しを受ける。

「ディノゾールの群れが、地球に！？」

俺達は直ぐに移動を開始した。

〜〜３０分後〜〜

メインルームのモニターには３０体以上のディノゾールの群れが映し出されていた。

「ここん所の怪獣って、こいつも含めてボガールに呼び寄せられていたんじゃなかったの！？」

「だったら、ボガールはまだ生きているってことか！？」

「バカ言うな！奴は、メビウスと、セリザワ隊長が…ツルギが倒したじゃねえか！」

そう、ボガールは自らの餌を海からでも地中からでも宇宙からでも呼び寄せられる怪獣だ。

その能力によって、２０年ぶりに怪獣が地球に出現した筈だった。

「ディノゾールは、もともと渡りを行う怪獣なんですよ。ただ、その進路上に地球がある訳じゃなくて、以前地球に降りたディノゾールの経路を間違って追っちゃってるんじゃないでしょうか？」

「頼むからうちの管轄に降りてくれるなよ…」

すると突然、リムエレキングが補佐官の頭の上に出現した。

何でも、粒子加速器の修理は完了したらしいが、トリヤマ補佐官の進言でＧＵＹＳのマスコットになったらしい。

そんな説明が終ると、モニターの映像のディノゾールが爆発した。

「何が起きたんだ！？」

「ライトン－Ｒ３０マイン…ＧＵＹＳスペーシーが宇宙怪獣の襲撃

に備えて、新たに布設した宇宙地雷です。」

モニターの方では幾度となく爆発を起こしている。

そして、それを避けるかのように何体ものディノゾールが地球から離れていった。

「なんだか…ちょっとかわいそうな気がしますね…」

「冗談でもそんな事言うな！

……怪獣を野放しにしちまったら、それだけで人が死ぬ、誰かが悲しい思いをするって事だ。

そんな思いをする人を一人でも減らすために…一つでも多くの命を守るために、俺達は居る。

ＧＵＹＳが有るんだ！」

その後、リュウは出て行った。

〜〜１０分後〜〜

宇宙地雷を抜けた１匹が日本に降下したようだ。

俺達はすぐさま、空のディノゾールを迎撃を開始した。

とは言っても、一度戦った事のある敵。

空中でウィンガーファンを使用し、竜巻でディノゾールを地上に叩き落し、スペシウム弾頭弾が首に命中し、ディノゾールは絶命した。

しかし、このまま放置しておけばディノゾールリバースが現れる。

それを知っていても、俺は何もしないことにした。

逆流のココロ（後書き）

最近、パソコンが禁止になりました。
おかげで今回は短くなりました。
週末あたりに頑張って更新してみますので、どうか暫くお待ちください。

逆さの強敵（前書き）

遅れてしまって申し訳ありません。

逆さの強敵

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

俺達はディノゾールを倒してフェニックスに帰還した。

すると、かなり嬉しそうな補佐官の声が俺達を出迎えた。

「いやいや、お疲れ様！この調子でね、バンバン怪獣を倒してくれたまえよ！そうすればな、レブの人気もな「リムです」」

しかし、またしても警報が鳴り響く。

「何だこれ…！ディノゾールの極性が反転してる…！」

モニターのディノゾールは首無しの状態で足を上に上げている。

そして、尻尾のようなものは体の中に収納され、足が首となり首の無くなった部分から足が再生した。

そして、完全に再生が終ったときにはディノゾールはディノゾール・リバースとなっていた。

「生き返りやがった！」

「尾の先端にある神経節が肥大し、新たな脳幹が形成されたんです。」

「要するに、頭が二つになって蘇ったって事！？」

その後、直ぐに会議が開かれた。

ミサキ総監代行が状況を説明した。

「ディノゾール・リバースは推進器官が機能せず、飛行は不可能なことが判明しました。
しかし、進路方向３０ＫＭ前方にはタマガワダムが存在。速やかな殲滅は必須です。」

「ダムに向かう根拠は？」

「断層スクープテイザーは本来、宇宙空間で水素分子を収集する為の器官なんです。
ダムの水を求めるのは不思議な事ではありません。」

あの鞭はＧＵＹＳの目といってもいい程の動体視力のジョージでも捉えれない。

「とはいえ、あの見えない二本の鞭を捉えるのは俺の動体視力をもってしても、相当厄介だぜ。」

ＧＵＳＹの耳でもあるマリアさんも聞き分けれない。

「私にもあの速さで動く二本の音を聞き分ける自信は……」

何故か今日は様子がおかしいリュウは、

「グズグズ言ってんじゃねぇ。」

その言葉に反応する二人。

「そうは言うけどな！俺らがディノゾールを仕留め損なえば！」

「ダムは確実に破壊されるのよ！？」

落ち着いた感じにリュウは言う。

「ダムがどうした？んなモン関係ねぇ。俺達がやんなきゃいけねえのは「リュウさん！！」」

ミライが怒鳴る。

「リュウさんのディノゾールが憎いリュウさんの気持ちは分かります！でも、リュウさんは間違っています！」

その言葉に怒るリュウ。

「なんだと！？」

「今のリュウさんはボガールに対する憎しみに心を支配されていたツルギと同じです！
僕達が戦う目的はそうじゃない筈です。リュウさんは言ってじゃないですか。
一つでも多くの命を守る為に僕達が居るんだって、ＧＵＳＹが有るんだって！！」

この話に一旦、区切りをつけてから隊長が口を開いた。

「対策はあるんですよね？」

「新たなマケット怪獣を使用します。」

〜〜タマガワダム付近〜〜

今回の作戦は、新マケット怪獣ウィンダムの遠距離からの攻撃で気を引き、隙を見てスペシウム弾頭弾を打ち込むという作戦らしい。

ウィンダムへの指示はミライが行い、リュウとジョージがガンウィンガーに乗った。

そんな作戦開始前に、コノミさんは落ち込んでいた。

「でもちょっぴり残念。」

「何がですか？」

「総本部がミクラスを、失敗作だって判断してた事？」

「しかも、誰でも使えるように運用実験までして…」

「そりゃそうですよ。コノミさんとジンカ君にしか懐かないんでもん。」

「ディノゾール！作戦ポイントまであと６０秒です！！」

雑談もそこそこに作戦開始時間がやってきた。

ミライが作戦ポイントに向かい、俺達は映像を送る中継班だ、って何時もと変わらないか…

「後十秒！9…8…7…6…5…4…3…2…1」

開始時間と共に、隊長からメテオールの許可が下る。

「メテオール解禁！！」

そして、現れるウィンダム。

ディノゾールに向かってレーザーショットを放つ。

しかし、断層スクープテイザーがそれを裁き続ける。

そして、ガンウィンガーが攻撃しようとした時、後ろの器官から火炎弾が発射された。

それをファンタムアディベイションで、避け続ける。

ようやく隙を見つけて発射した。

『スペシウム弾道弾！ファイア！！』

しかし、ディノゾールの首が後ろを向き、断層スクープテイザーでミサイルを切り裂いた。

ウィンダムもマニューバモードも時間切れとなり追い詰められるGUYS。

そこに光と共にメビウスが現れた。
スクープテイザーの攻撃を避けて、ガンウィンガーの援護によって懐に飛び込んだ。
抑え、蹴りを入れるも、その巨体と二本の首とその攻撃で状況は不利になる一方だ。
「E・HEROネオスとブラック・パンサーとグロー・モスでコンタクト融合！
現れろ！E・HEROカオスネオス！！」
現れるのはダークヒーローのような姿をしたカオス・ネオスだ。
「行け！カオス・ネオス！！ライト・アンド・ダークスパイラル！！！」
カオス・ネオスがディノゾールに近づいて爪で攻撃する。
しかし、その攻撃でカオス・ネオスに反撃しようとしたディノゾールの攻撃がガンウィンガーに命中した。
「しまった！カオス・ネオス！！」
素早くカオス・ネオスが近づいて、ウィンガーを抑えようとするが、そこにディノゾールの攻撃が命中して、カオス・ネオスがやられる。
しかし、ガンウィンガーは突然現れた青い巨人、ウルトラマンヒカリがキャッチした。

そして、二人は共闘し、ディノゾールに向き合った。

「永続魔法！波動キャノン発動！」

その間にも、魔法を使い俺はサポートに周り始める。

ヒカリがディノゾールのスクープテイザーを二本とも掴み、それをメビウスが斬る。

そして、ディノゾールの首を押さえ始めるが振り落とされる。

振り落とされたメビウスを蹴ろうとするディノゾール。

「トラップ発動！ヒーローバリア！」

その蹴りをバリアで防ぎ、その間にメビウスは後ろに飛ぶ。

「トラップ発動！デモンズチェーン！！」

鎖が現れ、ディノゾールを縛る。

しかし、5秒足らずで鎖は壊される。

「今だ！波動キャノン発射！！」

収束が完了したキャノンからすごい威力の波動が発射された。

それを喰らい、倒れるディノゾール。

そして、メビウスシュートとナイトシュートが炸裂する。
ディノゾールは爆発し、完全に消滅した。

〜〜岩場〜〜

俺とミライとセリザワ隊長が居た。
「ウルトラの母の治療のおかげですね！」
その事について話始めるセリザワ隊長。
その後、ミライはＧＵＹＳに誘うが、
「一緒に行きましょう！リュウさんが待ってます！」
「いや、リュウのそばには君が居る。」
そういって、去ろうとするセリザワ隊長。
でも、俺は詫びたい事が会った。
「あんたの中のウルトラマンに言ってくれ！俺がちゃんと調べなかったせいでボガールを増やしてしまって悪かったって！」
「いや、彼は自分は元・科学者だったのにそんな事に目をつけれなくて済まなかったと言っていた。」
「そうか…じゃあ、お互い様だ！」

「ああ、そうだな！」

そう言って今度こそ去っていた。

そして、青いウルトラマンのレジストコードはウルトラマンヒカリとなった。

逆さの強敵（後書き）

次は、アライソ整備長の初登場回まで飛ばします。１５話
その後はザムシャーの回ですね。１７話
後は、ナイトブレスを託された回を書くつもりです。１８話

１２話～１４話もしくは１６話の中で、リクエストはありますか？
個人的には、無いと嬉しいかな？ｗｗｗｗ

整備の意味

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

え～っと、あのディノゾールのトラブルからかなり時間が経った。
その間にも、いろんな怪獣が現れたがそこは省略させてもらおう。
俺達はまたしても会議中だったりする。
「約１２時間前、ＧＵＹＳスペーシーが地球に接近する宇宙怪獣レジストコードグロマイトを補足、これを撃破しました。しかし、その中枢器官が破壊を免れ、地表に到達したと思われます。」
「というと！？」
「１２分前、クマシロ山麓で大型生物の生命波が探知されました。クルーＧＵＹＳは至急、調査に向かってください。」
何で、海底とかに落ちないんだろう？
てか、なんでピンポイントに日本に落ちたんだ？エンペラ星人が操ってるのか？
「ＧＵＹＳ！サリーゴー！！」
「「「「「「「Ｇ．Ｉ．Ｇ！！」」」」」」」」
「そいつはできねぇ相談だ！」

すると、自動ドアから白いつなぎを来た５０歳位のおっさんが入ってきた。

「アライソさん？」

アライソ警備長、ガンフェニックスの整備責任者だ。

そして、其処に補佐官コンビが入ってきた。

「サコミズ君！？どうして出撃せんのかね！？」

それに答えるアライソ整備長。

「まだエンジンホイールの慣らしが終ってねぇ。」

「慣らしと言うと、故障でも？」

「故障ってワケじゃねぇが、万が一って事もある。」

俺はそこで質問した。

「センサーフェニックスの方はどうですか？」

「もし怪獣が出てきたら、センサーフェニックスの装備ではきついだろ！」

確かに。

しかし、手を重ねて拝むポーズで頼み込む補佐官。

「アライソくん！単なる調査だ！其処を何とか…」
しかし、それをばっさり切り捨てる整備長。
「拝んで飛ばせたら、整備はいらねぇんだよ！」
もっともだ。
しかし、補佐官は強硬手段に出た。
「え～い、致し方あるまい！マル！！」
マルは、立ち入り禁止のロープを取り出した。
「整備長、失礼いたします！」
そして、そのまま整備長をぐるぐる巻きにした。
「クルーの諸君！今のうちだ！！」
その後、しぶしぶ出撃した。
～～クマシロ山麓～～
そこでは、グロマイトが建物を壊していた。
メインルームから通信が入った。

『レジストコード、グロマイトを補足！』

『市民の避難、既に完了しています！』

『どうして、こう次から次へと怪獣が～～！？』

『はなせ、放せって言ってんだこの！』

画面では、アライソ整備長が何故か必死だ。

『飛ばしちまったものはしょうがねぇ！だが、ガンウィンガーとガンローダーはマニューバモードは使うな！！いいか！？絶対に使うなよ！！！』

それに、ダルそうに応えるリュウ。

『わーった、わーったよ。とっつぁんは、そこで見てなって！』

そこで、通信を一旦切った。

グロマイトはガンフェニックスに向かって光弾を発射した。

それを分離して避ける。

『やっろ～！ビームバルカン！！』

『ヴァリアブルパルサー！』

「センサービーム！」

しかし、その攻撃を受けても平然と立っているグロマイト。

『マジか！？全然効きやしねぇ！！』

『どうするの？これじゃあ埒明かないわよ！』

『くっそ～！何か手はねぇのか！？』

『スキャニングの結果が出ました。』

『石だ！！瓦礫や岩石を吸収して、強靭な鎧にしてる！それに邪魔されて攻撃が通らないんだ！』

『見て！』

すると、グロマイトは口から光弾を出せずに玉切れを起こしていた。

『玉切れか？』

不思議に思っているとグロマイトが口から光線を出して瓦礫を吸い始めた。

『そうか！リュウさん！首です！首を狙ってください！奴は食べるときだけ鎧に隙間が出来るんです！』

『だけど、首を狙うって事は、あの攻撃を真正面から受けるって事だぜ！』

『…マニューバーモードなら、避けられる。』

『だめだ！だめだ！小僧！何聞いていやがる！！』

「だったら、俺とセンサーフェニックスが行く！機動力なら上だし、整備も終ってる！」

『だが、センサーじゃ火力が低すぎる！なら俺が行く！』

『小僧！センサーの小僧に任せておけ！』

『え、えい！何でもいい！メテオール解禁！』

「じゃあ、遠慮なく！パーミッションツーシフト！マニューバー！」

俺のセンサーフェニックスは光に包まれ、高速で動き始める。

「行くぜ、グロマイト！！」

俺は右へ、左へと移動してかく乱しグロマイトに突っ込む。

そして、火炎弾を避けて相手の首に近づいた。

そして、瓦礫を吸収し始め、首の部分に隙間が出来る。

「喰らえ！センサーツーショット！！」

そして、センサーフェニックスの攻撃が命中したが、それを喰らってグロマイトは驚いて逃げていった。

〜〜フェニックスネスト〜〜

何故か、リュウが怒っていた。

「ジンカ！お前のせいで、グロマイトが逃げちまったじゃねぇか！！」

「じゃあ、どうしてほしかったんですか！？無茶して、俺達の翼を壊したかったんですか！！？」

「んだと！大体な、あんなとっつぁんの小言くらい無視しても問題なかったじゃねえか！！」

それを本人の前で言うか？

「おいコラ、小僧！てめえらへっぽこのおかげで、機体はガタガタだ！！

さっき確認したが、もしガンウィンガーかガンローダーがマニューバーモードを使ってたら、２０秒足らずで、機体はメテオールを切っていたぞ！！

センサーの方も、無理してよけすぎだ！こっちもしばらくメテオールは使えね！」

「メテオールが、マニューバーモードさえ使えりゃあ、あんな怪獣倒せたんだ！」

「メテオールなんて得体の知れねぇ物に頼んなきゃ、戦えねってのか！？昔はあんな物なくても立派にな「だから、墜落ばっかしてたんじゃねえか！！」

アライソさんの目が変わった。

「…何だと、小僧？」

喧嘩が始まりそうなので、みんなは必死に止め始めた。

そして、収まったと同時に隊長に頼み事をした。

「隊長さんよ。粋の良いの1匹…所望してもらえんか？」

隊長は笑って返した。

「1匹？」

その後、アライソさんとミライは出て行った。

〜〜その後〜〜

サコミズ隊長の説明を聞いたリュウとテッペイさんは整備室でガンフェニックスの整備をし始めた。

その3時間後グロマイトが出現した。

〜〜クマシロ山麓〜〜

『作戦は分かってるな？』

『光弾を吐かせて腹ペコにする。』

『食事の瞬間首の付け根を狙い打ち。』

『あの光弾をよけながらだぜ？』

『マニューバーモードしかないわね！』

「で、テッペイさん？整備のほうは？」

『それが、僕たちの素人整備じゃメテオールに耐え切れないんですよ。』

『そんな！？』

しかし、ガンウィンガーは相手のほうに突っ込み始めた。

『こんなやつ、クルーズモードで十分だ！！』

光弾をギリギリで避けながら、特攻気味に突っ込む。

『あの、バカ！！』

『ガンローダー、センサーフェニックスは全力でガンウィンガーを援護！！』

『「G．I．G！！」』

そして、グロマイトに攻撃を仕掛ける。

「こっちだ、こっち！！」

しかし、リュウはスピードを上げていく。

『危険です！対Ｇ限界超えてます！』

『そんなの知るか！ウオオオォォォ！！』

『あれじゃあ、マニューバーモードじゃなくたって！』

『バラバラになるわよ！』

俺は無線を切った。

「あのバカは！来い！ロードランナー！」

グロマイトが食事をしようとした時、ガンウィンガーが突っ込んだ。

しかし、それを読んでいたかのようにグロマイトは食事を中断して、光弾を発射した。

その攻撃の前に、小さなピンク色の鳥が走ってきた。

そして、大きく翼を広げて光弾を受けた。

ロードランナーは攻撃力１９００以上の攻撃では破壊されない能力を持つ。

ただし、受けた後は１０秒間気絶する。

グロマイトはさらに光弾を発射した。

今度こそウィンガーにあたりそうになった時、青いビームがそれを

弾いた。
そこには最新型超高速追撃戦闘機ガンブースターが飛んでいた。
『小僧！今のは脱出するタイミングだぞ！！』
『とつぁん！！』
『ニューヨークからただ今到着しました！』
『直接飛んできたのかよ！』
『小僧！使えるな！？』
『とっくにシュミレーションで習得済みだよ！行くぞみんな！！』
『「G．I．G！！」』
『センサーフェニックス！スキャナーオン！全員に今の気流情報を送ったぞ！』
ガンウィンガーのコクピット部分が分離する。
『よし！ガンスピーダー1！リジェクション！』
ガンローダーも分離する。
『ガンスピーダー2！リジェクション！』
『ガンブースターシステム、オールグリーン！』

ガンブースターのコクピットも分離する。

『ガンスピーダーＥＸ！リジェクション！』

そして、着陸する。

『ガンスピーダーＥＸ！着陸します！』

ガンローダーの置くのスピーダーが現れる。

『ガンスピーダー、リローディング！』

ガンウィンガーのコクピットにスピーダー不安定だが入る。

『ガンスピーダー！リローディング！リュウ！気流が不安定だ！気をつけろ！』

『分かってるって！任せておけって！』

『リュウ！！ガンブースターの機体感覚はガンウィンガーほど甘くない！のぼせるな！！』

『Ｇ．Ｉ．Ｇ！』

しかし、後もう少しのところで、光弾が飛んできてギリギリで避けた。

そこに、メビウスが現れグロマイトを引きつけはじめた。

さらにその後、リュウのバイカルがイエローゾーンに入り、体温などが上昇し始める。

『システムエンゲージ！今ですリュウさん！！』

『ＧＯ！！』

そして、ガンブースターの接続は完了した。

しかし、メビウスは余所見をしたせいで攻撃を食らう。

『リュウ！メテオールだ！！』

『パーミッションツーシフト、マニューバー！』

高速で移動するガンブースター。

そこに、光弾が飛ぶ。

しかし、そこでガンブースターの能力が発揮された。

『スパイラルウォール！！』

回転を始めたガンブースターに光弾がぶつかるが、それを弾いて相手に返した。

それを食らって怯んだグロマイトは弱点をさらけ出した。

『ガトリングディトネイター！！』

其処にガンブースターの６本の光線が相手の弱点を正確に着いた。
更にメビウスは拳に電撃をためてグロマイトにライトニングカウンター・ゼロを放ち、グロマイトは完全に消滅した。

〜〜フェニックスネスト〜〜

みんなは無事帰還し、ガンブースターがこなきゃ危なかったなど話ていた時、アライソさんが来た。

「ガンフェニックスを弄くりやがったスカタンはどこのどいつだ！？」

「おいとつぁん！なかなかやるだろ？」

「やっぱりてめいか！半端な整備しやがって！！ええ！？仕事が増えちまっただろうが！！」

「いって〜〜！！何すんだこのいって〜な！！」

「やるか！」

「おう！やってやろうじゃねえか！！」

やれやれ、どうやらまだまだここの喧嘩は止まらなそうだ。

隕石の強敵（前書き）

本当に久しぶりですね！
これからもよろしくお願いします！

隕石の強敵

タスケ　ジンカＳＩＤＥ

今日のフェニックスネストは異常だ…

みんなが静かだ…

それは夜だからだろうか…

それとも、補佐官達が剣道をやっているからだろうか…

もしくは、真夜中の現れるおおしま彗星を見るためか…

しかし、その彗星で３体の宇宙人が戦っている事を、俺以外は誰も知らない…

そんな中、テッペイさんの一言で皆がこちらを向いた。

「あれ？おおしま彗星の軌道が変わった？」

ミライが尋ねる。

「地球の重力に引かれたとか？」

「否、軌道からしてそれはありえない。」

すると、テッペイさんはキーボードを打ち込んだ。
「まさか！…このままじゃ、おおしま彗星は地球に激突する…！」
「えぇ～！？」
「マジか！？」
補佐官が入ってきた。
「おおしま彗星が地球に激突だと…！？」
「軌道計算の結果、確率は９４％です！」
「はぁ～～」
バタリと倒れる補佐官。
「降下予測地点は！？」
「現在の軌道だと、太平洋上です。」
「何だ、海か…だったら安心だろ…」
「直径約７００Ｋｇの物が直撃するんです！発生するエネルギー量は推定でも約５０００ギガトン以上…！」
「…地球の殆どの場所で大津波が起こる……」
「……既にＧＵＹＳスペーシーのＶ－９９が対策を立てている。シ

ルバーシャークGによる攻撃が決定した。」

〜〜彗星上〜〜

マグマ星人と戦っているザムシャーはシルバーシャークGの攻撃を察知、そのまま剣で跳ね返し、破壊した。

そこを隙と見たサーベル星人。

しかし、ザムシャーの奥義惑星斬で彗星ごと斬られてしまった。

しかし、新たに現れた星人とザムシャーは地球に向いながらも、交戦を開始した。

〜〜フェニックスネスト〜〜

「そんな馬鹿な！？」

「どうしたのかね！？」

「おおしま彗星は粉々になって、その破片は日本への軌道を描いています！」

「どうなるのかね！？」

「日本の壊滅は間違い無い…！」

その後、マリアさんの本が閉じた所で皆は動き出した。

彗星で起こったことを知らずに、ＧＵＹＳジャパンは行動を開始した。

「ＧＵＹＳジャパンの出動を、総本部も承認した。」

「よっしゃぁ！！ガンフェニックスで１つ残らず叩き落してやる！……あ！」

「ガンフェニックスはオーバーホールの最中！」

「グロマイト戦でも誰かさんの無茶のせいで！」

俺とミライが動き出した。

「「でも、ガンブースター（センサーフェニックス）は飛べます！！」」

「おい、ミライ、ジンカ！」

〜〜センサーフェニックス内部〜〜

『「センサーフェニックス（ガンブースター）！バーナー、オン！」』

２機の機体は破片群に向かっていった。

『破片群との接触まであと、・・・自動警戒システム作動？』

俺とミライの機体の横に2体の宇宙人が飛んできた。
『宇宙人が2体！？』
それを聞いた補佐官が何時もとは違う声を出していた。
『ブースターの君は、宇宙人を置いたまえ！』
『ですけど…！』
更に覇気がこもった声で怒鳴った。
『四の五の言わずに追うのだ！』
『G．I．G。』
『補佐官！彗星の破片はどうするんすか！？』
『そんなのは決まっておろおが！』
『もう一度、ミライ君に向ってもらった方が良いんじゃ…？』
『その必要は無いよ。』
あちらは、準備を開始したか。
なら、こちらも出番と行くか！
「来い！スターダストドラゴン！レインボー・ネオス！」

さて、打ち落としますか！！

〜〜フェニックスネスト〜〜

宇宙人2体の着地で停電を起こしたフェニックスネストだが、皆は既に1本斬られてしまった設置型シルバーシャークGを皆が協力して、ケーブルに接続し始めた。

「破片群の到達まで時間がありません！なぞのエネルギー体とセンサーフェニックスじゃあ、打ち落としきれません！急いで！」

ミサキ女史の言葉とともに、マル補佐官補佐が大量のケーブルと共に入ってきた。

「今からこれを！？」

「間に合わせる！！」

マル補佐官補佐の力強い声が響き、ミサキ女史は資料を投げ渡した。

「私達の指示道理に繋いで！」

「「「「「G・I・G！」」」」」

全員が走り出した。

そして、何十分も基地を走り回り、繋ぎまわった。

〜〜宇宙〜〜

「シューティングソニック！レインボー・フレア・ストリーム！センサービーム！」

2体のモンスターの攻撃と光線が破片群を破壊していくが、スターダストも、レインボー・ネオスも動きが遅いのでさっきから隕石のせいでガリガリ体力が削られている。

って、もう限界時間が！！

俺も、今ので何個か見逃してしまっている！

「っくそ！原作通り行くのか分からないのに！！」

急いで、追いかけ始めたが…

ピウン！ピウン！

「ほ…間に合ったか！」

『ジンカ！そのまま打ち落とし続けろ！！』

「G．I．G！」

『第二陣！来ます！』

そのまま打ち落としていくと、巨大破片が飛んで来た。

『これで最後です！』

『よしゃぁ！』

『待ってください！ジョージさんが撃って下さい。下手に壊せばまた新たな破片が増えるだけです。』

『地球の命運は、お前の腕にかかっているって事だ。』

そのプレッシャーの中で、ジョージさんは、

『最高のプレッシャーの中で、最高のシュートが打てるってもんだ！』

最高の宣言をした。

『ターゲットライン、突入…！』

そして、引き金を…

カチッ…

引いた。

その赤い光線は吸い込まれるように隕石に命中し…

破片を残さず、消滅させた。

『よ～し！』

『『『やったーーー！！！！！』』』

皆が喜んだ。

そんな中、ザムシャーはもう一度真に強くなってから地球に来ると宣言し去って行った。

『ガンブースター、ミライ、帰還します。』

そんな中、俺は……

「すいません。燃料が切れましたんで、誰か迎えに来てくれませんか？」

『あ、ブースターの燃料は殆ど無いです。』

「マジですか…」

「どれ、我が送り届けてやろう。」

「へ？」

人生で初めて、宇宙人の手で地球に帰還した俺だった。

隕石の強敵（後書き）

さて、次はヒカリさんログアウトですね……
その後は1、2話挟んで、超獣編ですか……長いな…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7007x/

メテオールを超える力

2012年1月10日09時45分発行